

追  
想  
記

## 親族・元母校先生・知友など

### 家庭における父

針塚正樹

父と家族　兄や姉たちにとって父は怖い存在であつたらしい。父は子供たちから敬遠されていた。そういつた中で私だけは巾着のように父につきまといつていた。姉たちは私がよく父のそばに居られると思つたという。姉妹六人に囲まれた数少ない男児として、また二人の兄とはかなり年齢を距てた男兄弟の末弟として、たしかに私は得な位置を占めていた。

そのように五十才以前の父は家庭にあつてはきわめて厳格であつたらしい。信州の嚴寒にも素手、無外套でいる兄たちに、母が毛糸の首巻を買つてやったことが父の怒りにふれて、折からの積雪の上に兄たちは抛り出されたということである。ほんとうに可愛想だつたと母が述懐していた。

そのような教育はむしろ逆に結果して、長兄は分に過ぎた能力を要求されて苦しみ、次兄は健康を損ねて夭折した。こういった経緯のあとで私が幼年期から少年期に進み、父の挫けかかった心を占有したらしい。したがって姉たちからはすい分甘やかされていゝると思へたに違ひない。

私の小学校時代の大正末期の家庭は、子供も多かったし父の主義もあつて質素そのものであつた。私が甘やかされたといつても私の買つて貰えた遊び道具は、大きな三輪車と野球のグローブ位のものである。小型自転車と空気銃はどうしても買つて貰えず、自転車だけは当時水先人試験を受ける為に休業していた間庭の義兄にねだつた。昭和初年中学校に入つてから母の助けで靴スケートを買つてもらえた。三年になつてからはスキーも買えたり、父の洋行土産のラッパ付き蓄音機をビクトローラに変えてもらえたりして、何かと要望が叶えられるようになった。

これは私が青年期に達しようとする時であり、また昭和二年祖父の死によつてその家督を相続して多少生活にゆとりの出来たことによつたものであらう。

このような状態からおして、兄や姉の育つた明治末年から大正年代の頃は思いやられる。それでも文部省の課長時代には書生を数人おいて、うなぎが食べたいといへば、数日待たせて原稿料をかせいで一同を引連れて食べに行つたということである。

震災の前年の大正十一年次兄が三年越しの骨髄炎で死んだ。當時寄寓していた岩崎喜三郎という柔道の先生が、その間、病院で付添つて看護して下さつたことは忘れられない。この兄の死は、兄が優れていたということ、あとあとまで母の語り草であつた。

父の落胆はひどかったらしい。その頃、父と長兄が腸チフス、長姉の再婚、次姉の結婚と相次ぎ、また母は持病の腎臓炎で寐ている方が多かった何年かが続き、生活が苦しかったことを、後年母からよく聞かされた。

物と時間を大切にしろと口ぐせのように言っていた。これは家庭のしつけの方針として、父がその幼少時の苦しい体験と、ドイツ留学から得たものに当時の家計の実態からのものが加わっているものであらう。

そういった中にも夏休みには別所温泉の半田孝海師の御厚意によって常楽寺別荘を拝借し、家中で交替に行ったことはぜいたくなものであった。その荷物を運ぶために上田から別所温泉まで三里の道を八八車のうしろから姉たちと一緒に歩かせられて無暗に疲れたことが幼時の記憶に残っている。

私が中学の高年に進む頃からは遠くに嫁いだ姉たちが、それぞれ子供らを引連れて夏休みの上田の家を賑わせた。その頃にはその姉たちが、父の面前で平気で怖かった昔の父の話を冗談のように話すのを、苦笑しながら聞いているような父となっていた。毎年のように増えていく孫たちの前で百面相をしてみせる父でもあった。もっともこの顔は私の幼時の記憶にもあった。孫の数は父の晩年には二十一人を数えるようになった。

私が大学を卒業した昭和十二年の翌年には父も退官した。その前後は父の生涯の最良の頃ではなかったかと思う。家庭においては末妹が母親に甘え、父もたまには母や妹や、故郷を遠く離れて

学校に来ていた学生等が遊びに来ると、その団らんの中の仲間入りをするこさえあった。盛んに墨筆に親しみ、正村竹亭先生に母と一緒に南画を熱心に習っていたのもその頃である。

昭和十五年には卒業生諸氏の御厚意から郷里に永住する家を作って頂き、父は大喜びで上田から生まれ故郷の新居に移った。長男の身でありながら、青年らしい大望を抱いて出郷して以来五十余年振りに郷里に戻り、父祖の墓守りをする事が出来るようになって父は満足していた。

昭和十七年春私に長女が出来て、その初の内孫を抱いた。「赤ん坊を抱くのは初めてでしょう」と都丸の姉にひやかされていた。

その年の二月には母は亡くなっていた。虫垂炎から腹膜炎を併発した。物資も欠乏し良薬はなかった。ラジオだけは勇ましくシンガポール攻略を伝えていた。父は毎日渋川から前橋の病院まで寒風の中を電車で通った。発病して四、五日したある日の夕方、病院からの帰り道に独り言のようにつぶやいた。

「かあさんはだめかも知れないなあ」

父や母は絶対に強いもの、容易には死なないものという子供の頃の漠然とした意識が、二十八才の私の心のどこかにか潜んでいたらしいし、まさか盲腸でという気持でいた私は、愕然とした。それから一週間もたたないうちに母は腸が通じないままに長逝した。

父が急に年老いたのはその頃からである。母が死ぬ三、四日前の病室の窓から、寐たままの母の背に腕を廻して静かにじっと

抱き上げている父の姿が見えた。そうすることによって母の苦痛はいくらかは軽減されるものであったのだろう。それまで私は父が母に優しさを示す意味での指一本触れるのを見たことがなかった。それだけにその厳肅な空気のうちに容易ならぬものを直感した私は、病室にも入らずに飛び出して、信仰もしていない神社や、街裏の稲荷様まで祈り歩いた。

父と畑 幼時から農家の長男として人一倍働き、仕事が早いので村人から「はやの長さん」のあだ名で親しまれ、父親のお気に入りであった父は、上田にあって畑のある家を条件として借り受けて土に親しんだ。ひでりの続く信州の夏の水やりは私共の仕事でつらいことだった。ことに金山町の家の畑は広かったので生産物も多く、出来た南瓜やトマトを強制的に毎日食べさせられたのには家中閉口した。農夫の山岸さん親子はよい助手であった。

畑仕事に疲れば、好物の生たまごや蜂蜜（父には心臓の持病があり蜂蜜は発作の特効薬であるといつて常備していた）を飲んで横になり、昼寝をするか読書をするかしていた。私は父が机に向って本を読むのを見たことがない。愛読書の多くは和漢の古典で、ことに四書五経・漢詩の類であった。晩年は碧巖録を楽しむに繰り返し愛読してその面白さを話してくれた。戦前には「俺の教科書」を読む時もあった。講談倶楽部という雑誌の講談である。亡くなる頃には易経を熟読していた。夜は客のお相手をしていた。昭和十五年上州の郷里に引上げて来てからもテニスコート位の畑を楽しみ、余裕があれば自分の弟の畑の草を抜いたりしていた。

戦争中には自家製の茄子をリュックに入れて東京の私の家へ運んでくれたこともある。

終戦近くになって郷里の家には、私共一家族と妹一家族が疎開して来た。それまで同宿して父の面倒をよく見てくれていた義兄の都丸も、「お父さんの世話が出来なくなって申しわけない。家族をよろしく」と私に言い遺し、四十余才の体をひっさげて出征して、そして戦病死した。

終戦時には都丸遺族五人、妹の野口一家四人、それから夫が出征して九州から引揚げてきた末妹一家二人、私共三人と父とを合わせて十五人の大家族となり、返却や開墾によって増えた三反歩余の畑を皆で耕した。私の勤務中は父が畑を打った。終戦の年の暮には末妹の貞子が腸チフスにかかり、その時はその夫も戦死していたのであるが、それも知らずに幼い男子を一人残して死んだ。

二人の男の子を戦前に失い、妻を戦争中に亡くし、また可愛がっていた末子も死んだ。友人の生存者もほとんど他界して寂しうであった。

晩年には肥桶を担いでみては、昨年はもっと楽だったといつて衰えていく体力を試していた。慢性の関節炎の膝をさすりながらも、こまごまとした家の廻りの片付け事などしていた。水田も一反歩ばかり作るようになって水番もしてくれた。

そんな父に励まされて私共は農事の全く経験のない姉や妹たちと自分等の食糧自給に精出した。家内は大勢の台所を主に引受け、

渋谷の街や近在に父が用事のある時は、都丸の姉がリヤカーに乗せて父を運んだものである。こんな状態のうちに昭和二十四年の秋彼岸に持病の狭心症が昂じて父は急逝した。

**父と刀剣** 父は刀剣が好きであり目も利いたらしい。戦争中には丙種合格の私がお役に立たないからといって、愛蔵の刀を出征させた。軍刀に手頃な刀は私のために忠告一刀を残して皆出払った。四十数本は出たと言っていた。したがって今残っているものは短刀か特に長い物ばかりである。

貧困な農家の子がどうして刀剣に興味を持つようになったかは聞いていない。若い頃住んでいた東京の家にも刀が置いてあったから、この趣味は相当早くからあったらしい。このことはその家庭で示した数々の教えが士族のように厳格であったことについてもいえる。農家にはそのようなしきたりはない。

暮のボリーナスで家へ持ち帰る分はしばしば刀剣に変わり、母の予算を狂わせていた。しかし元来父は刃物が好きで、刃物屋からナイフや鉈をよく買ってきた。父に研いでもらった鎌はかみそりのように切れて恐い位であった。

父は柔道はうまかったらしい。学生時代には講道館の近くに下宿して駒場の大学に徒歩で通っていたということである。兄たちは小学校の頃から柔道を習わされた。

しかし剣道の心得はなかった。それでも試し切りは自慢であった。座敷で大上段に振りかぶり母をあわてさせていたことがある。母の話によれば、一度目釘が抜けているのに気が付かず、刀身が

飛んだことがあったからだという。私も小学生の時从小沢丘先生に剣道を習わされた。

戦後恩給も一時停止されて、父は刀を売ろうかと私に相談したことがある。私はおしとどめた。そしてこの危機は父を説得して父祖伝来の山林を売る手づるをみつけることによって解消した。父の死後私の外国留学の仕度金に三本が犠牲になった。まことに申しわけないが仕方がなかった。父は許してくれると思う。あとに残った三十数本は私が愛蔵している。父の遺言は、「刀剣は国宝也。逸散する可からず。」と「人生如夢相似」とあるだけである。

**父と謡曲** 歌を唱えばおよそ調子はずした。鴨緑江節や童謡の「兎のダンス」の一節を、とっぴょうしもない大声で唱って私どもを笑わせた。ドイツ留学中は人に先んじて宮廷ダンスを習い大いに青春を謳歌したらしい。ダンスシューズが下駄箱に最近まで入れてあった。そのみやげのドイツ語の歌を唱うこともあったが、それもメロディーになっていなかった。

そんな父は謡曲だけは調子が良かった。師匠は松代辺の高橋という恰幅のいい先生で、仲間は阿形・石倉・早川・遠藤・佐藤(利一)・佐藤(春太郎)といった先生方であった。

大晦日の夜は阿形先生御夫妻が見えて、納めの一くさを謡うのを慣いとした。新年二日には謡い初めとして父と母は共に吟い、或は父の謡いに合わせて母が舞った。その時はいつものように母からのリズムに対する苦情や注文も出ず、父の調子にうまく合

わせている様子であった。その引き緊った気分の中に流れるなどやかさは子供心にも美しくうつった。母が晩年に観世の能舞台で藤戸を舞った時、橋岡久太郎先生が鼓を入れて下さったといつて、母が一生一代の誉れとしていたことを父は語ってくれた。

戦後姉や妹と一緒に私共夫妻は父から謡曲を教わった。そんな夜は父も楽しそうであった。耳が遠くてラジオも楽しむことが出来なくなっていたのも一つの理由である。

**父と煙草** 父のたばこ好きはよく知られているらしい。父の物入れの押入れには頂き物の朝鮮人参や数本の洋酒と一緒に外国製の葉巻の箱が絶えなかった。日用のものが敷島からエヤシップの缶入りに変わり、やがてチュリーとなりそれが桜と改称されて戦争となった。

戦争中は私も喫煙するので二人でたばこに苦勞した。父が頼まれて渋川の芸妓学校の先生をしていたので、義きょう心に富んだ老妓がきせるまで添えて、きさみや巻たばこを持ってきてくれたのは父を感激させていた。

戦後また交通の不便の時、群馬県の選挙管理委員長をたのまれた。心臓と膝の悪い父は満員電車に乗ることが出来ないで、私が県庁に自動車を頼んだが全く相手にされなかった。タクシーを頼む余裕もなかった。で、(当時渋川前橋間のタクシーは私の俸給の二、三倍はしていた)私がリヤカーを引くことにした。

私が、踏むベタルを休めて、利根川を見おろしながら二人で喫った自家巻きのたばこの味は忘れたが、その時の気分は今もって

忘れられない。「国破れて山河ありだなあ」といいながら父はたばこを持った手首で膝に字を書いていた。

**父と猫** 家に猫のいないことはほとんどなかった。皆駄猫であるが、私の覚えていいるブチ五郎も、金魚と心中した二代目ブチ五郎も、どの猫も父の靴音と特徴あるせき払いを聞いて、家のだれよりも早く玄関に迎え出た。山へ行けばまたたびのみやげを忘れたかった。猫の病気には内科も外科も硫黄が効くことを私は小さい時から見ていた。お客が猫を褒めると機嫌がよかった。朝晩の猫の食事は父がやった。魚の骨を噛みくだいてやっていた。父には特別に多くつけてある貴重なご馳走も、大半は猫の御馳走になつて家人を惜しがらせた。猫の不仕末の清掃は父の役目であった。

父は死ぬときも猫と一緒に寐っていた。その日秋晴れの午前中草を掻いていた時、めずらしく叔母(父の妹)がたずねてきた。そのあとで少し疲れたし、胸がいつものように痛むといつて昼食も中断して寐床についた。しばらくして小用に起きたが、その足で猫を呼び抱いて再び床についたことは家人が知っている。それから二、三十分して隣室で子供等が騒ぐのをたしなめにいった家内が、「御気分はどうですか」と声をかけたが返事がないので、すでに息のない父をみつけた。猫は父に抱かれたままぐすり寐込んでいた。

それから十二年たった今日もお、その猫は老軀をたいぎそうに運びながらも、祖父を知らぬ私の末子に甘えている。ミィミィ

と私が呼べば呼ばれた数だけ尻尾の先を振りながらも、日向ぼっこに余念がない。(嗣子・農林省蚕糸試験場養蚕部長 農学博士)

## 晩年の父

——戦争たけなわの頃から最期まで——

### 都丸ふぢ枝

昭和十七年二月に母に死なれ、父と妹貞子二人だけになった豊秋村(現在渋川市)の実家に、私も一家が移り、一緒に暮らすことになったのは、同じ年の五月だった。その頃の父はまだ元気で、野菜など上手に作っていた。家だけでは食べきれないので、近所の非農家に、茄子や胡瓜、トマトなどを持って行ってあげるのが、私の仕事の一つだった。父は「食物を腐らせてはいけない、食べきれなければ、喜ぶ人にあげろ」と、いつも口やかましく言っていた。

x x

昭和十八年七月始めのある朝だった。「晴治さん、尾瀬に早く連れて行ってくれなくては、足がガクガクになって行かなくなってしまうぜ」と、父に突然言われ、都丸はあわてて準備し、四、五人の気の合ったかたがたと、二泊三日の尾瀬行きを決行した。父が七十三才の時だ。弱くなったとは言え、足の強いのが自慢だった父は、とても元気で、若い者に負けずに歩き、上機嫌で帰宅した。上州生まれでありながら、まだ赤城つつじを見たことがな



尾瀬にて(中央先生の右が都丸晴治氏)

いという父を、その年都丸は赤城山に案内した。父の足を気づかって、自動車を降りてからは、馬で案内したそうだが、父は却って苦痛だったらしい。けれども都丸には何も言わなかった。その年の秋親戚の娘の結婚式で、秩父の長瀬へ行くことになり、都丸はその機会を利用して三峯山へも案内した。

× × ×

戦局の進むにつれて、「国民の心構え」と言うようなことを依頼されて、よく方々に講演に出かけた。淡川の料理屋組合が何かに頼まれて、芸者さんや女中さんたちに話をするのが、一番難かしく「困った、困った」とよく言っていた。戦争に行く若い人たちに大切にしている日本刀を惜しげもなく上げたり、母の宝石や方々からいただいた銀製の功労賞や記念品を、蔵から全部出して、乳母車に一台も供出し、勝つために協力した。山の杉や檜も言われるままに、安い値で供出した。木を切った後の一町何段歩かの土地には、また植林する予定でいたが、食糧増産に協力して、その近くの農家に無償で貸して喜ばれた。しかしその時開墾したために、結局戦後の農地解放で、手放してしまった。

× × ×

昭和十九年六月都丸が召集されてからは、父の好物の入手も困難になり、田舎のこととて、魚肉の配給もなく、闇物資を買う方法を知らない私どもにとっては、栄養物など入手するすべもなく、父の食物を得るのに随分苦心した。その頃から父の足は目に見えて衰えて行った。終戦後の二十二年頃には、町の床屋へも独りで出掛けられないほどだった。私は父をリヤカーに乗せて、どこへでも引いて行った。

× × ×

後にも述べるが、昭和十九年から二十年の春にかけて、弟妹の家族たちが疎開して来たので、十五人の大世帯になった。神戸の

長姉は焼け出されて、命からがら逃れて来て、近在の義兄の実家に間借り生活を始めた。ちよいちよい、その姉と子供たちが来るので、その時は二十人を越す人数になり、炊事係の私は大変だった。御飯は三升釜で炊いて一回に食べてしまう始末、洗う食器だけでも、大きなざるに山盛り二杯もあった。勿論食糧は足りない。自給以外に道がないので、親戚に貸してあった田畑の一部を返してもらい、弟正樹の指導で、生まれて始めてのお百姓を始めた。庭の草取り位しかしたことのない私どもは、妙な手つき足つきで、一生懸命に働くのだが、馴れぬこととて、ヘマばかりしては、本職のお百姓さんに笑われ、父にはお小言を言われ、それこそ泣くにも泣けない気持で、かぼちゃやさつま芋を作った。これを配給の粉に混ぜて『おやき』を作って御飯代わりに食べ、また御飯にはさつま芋を沢山入れて炊いたりで、食事の用意に時間のかかることおびたしかった。近くに居る叔母たちに「この家は毎日おふるまいの様だね」と言われた。父にだけはまじり物のないパンを食べさせたくて、やっと工面したうどん粉で少し作って上げるのだが、父はそれを少ししか食べず、ほとんどを孫たちに小さく切って分けてしまうので、その度に私たちは有難迷惑だと、父とよく口争いをしたものだった。

× × ×

戦争の被害はいろいろな形で父の身边に現われて来た。昭和十九年八月都丸はマニラで戦病死したし、十八年結婚した妹貞子は夫が出征したために、十九年六月赤ん坊を連れて戻って来た。妹



野口美津枝一家は、その年十二月に母子三人で、東京から疎開して来た。翌二十年三月正樹は病妻光子と幼児を連れて、東京から戻って来た。同じ二十年三月貞子の夫野口七五郎は、レイテ島の敵前上陸で戦死し、五月には東京青山の父の持ち家二軒が空襲で焼けた。渋川も家の近くに大きな軍需工場が三つもあったので、終戦直前には爆撃が激しくなり、爆弾の破片で家も大分いたんだ。隣組に割当てられる戦時国債の半額は、父が買わされたので、毎月その金のやりくりも容易ではなかった。二十年七月から終戦後十二月までの間、孫たちは代わる代わる赤痢・腸チフスにかかり、病院に隔離された。そしてその十二月には貞子も腸チフスになり、生後一年十カ月の愛児靖彦を私たちに「頼む」と言いながら、亡くなった。お医者さんの好意で、父は避病院に泊り込んで末娘の看護をした。母が亡くなった時、泣いていた私たち姉妹に「大事の時に取り乱すのは愚者のすることだ」と叱った父は、末子の貞子の時はとめどもなく涙を流した。

#### 悼貞子

よべはとて答ふる笑のなきものを呼びびても見たき親心かな  
一筋に我を力とたのみ来しあこはゆきしかいとしまこやも  
いとし児を後にのこし逝く親の心はいかにかなしかるらむ

これ等の短歌を貞子の初七日の日、色紙に書いて私に渡し、「これが俺の今の心境だ」と言って声をつまらせながら、自室に入ってしまった。

大連に行っていた次姉輝子の消息不明が、又父の心配の種だったが、二十二年三月突然子供達を連れて帰って来た。髪は真っ白にやせおとろえて、お化けのような姉を見た父は、暫らくの間声も出なかった。長姉の夫間庭決夫は、南方へ軍属として行ったまま帰らず、次姉の夫中里龍は、終戦後ソ連に連れて行かれたまま消息不明で、姉たちは何かと父を頼っていた。然しこの義兄二人は父の死の前後に無事帰って来た。

#### × ×

物資も出廻り始め、私たちも買物が要領よく出来るようになって、生活が大分楽になった。二十一年春だった、父は町に用事があると行って出掛けた。外で遊んでいた小さな孫たちが、家の中に飛んで来て「おじいちゃまが棒の先きに薪と石をぶらさげてかいで来た」と、大騒ぎするので、私たちは父の頭がどうかしたかと、驚いて門の外に飛び出して見たところ、父は「町で頑丈な天秤棒と砥石と鉋を売っていたので買って来た」と言って、天秤棒の先きに鉋と砥石をぶらさげて、悠々と上機嫌で家に入ってきた。私たちはあっけにとられて、体裁など考えない父を見ていた。又ある時勢多郡宮田の不動尊を見ての帰途、利根川添いの道をゆっくり歩いて大正橋を渡り、大分くたびれたので休もうと思つて、横道にそれたところ、墓地に出た。そこに新しい大きな墓標に「羽鳥俊太郎之墓」と書いてあるのが、目についた。父は「おお、俊さんこんなところにいたのか、会いたかったぞ」と言つて墓に近づき、手を合わせてねんごろにお経を上げた。俊さん

は父の小学校友達で、想い出話によく出て来る名前だった。おだやかな春の傾いた日を浴びて祈っていた白髪の父の姿は、今でも私のまぶたに焼きつけられている。

× ×

戦後のインフレは、父の常識では追いつけなくなっていた。父に食べさせたくて、やっとの思いで手に入れた玉子も「そんな高い物は俺は食べない」と言うので、正樹と私とで「今はこの値でなければ絶対に買えない」ことをよく説明して、食べてもらうことになったが、これも孫たちに少しずつ分けてしまおうので困った。家が焼けなかったことを喜んでいたが、非戦災者税・財産税等、父としては莫大なお金を取られ、農地解放で所有田畑の大部分を解放した。父の何よりも楽しみだった日本刀のコレクションも、強制的に押収されたものが多い。また新円切替で貯金はおさえられ、恩給も一時停止された。戦争中山林の供出命令が来ると村の山持ち等はいつも「針塚先生のところに行け」と言ったりと聞いている。一部農民の闇売りも噂に出る。若い人たちは父の理想の教育とは、大分離れた方向に進んで行く。中央では無政府・無警察に近い状態が続き、群馬県出身の某代議士は議会で放尿したとか、大きく新聞に出る。ていねいに新聞を読むことが楽しみの一つだった父は、「新聞を見るとなお気持が悪くなる」と言って、あまり見なくなつた。そんな時旧友の元代議士木曾三四郎さんが、東京からの帰途よく寄って下さった。私どもも手製のパンに、庭のいちじくや桑の実で作ったジャムをつけた代用食を食べながら、父と共鳴し

て悲憤慷慨し、またお互いに慰め合っていた。

× ×

漢学の老友も二、三人、時々自家製の柿・栗・山芋などを持って訪ねて来られた。又近所のお百姓さんや、出入りの職人さん等が、なにかと父の好物を持って来てくれると、自分で玄關に出て行って茶の間に「あがれ、あがれ」とすすめる。「服装がきたないから」と遠慮する人に「百姓は野良着が通常服で昼間から羽織を着ているようでは駄目だ。私だって野良着だ」と、つぎの当ったズボンを見せるのだった。又村の老人たちが五、六人来てくれ、昔話をしたり歌を唄って下さったりするのが、せめてもの父の慰めだった。

終戦後村祭が復活し、私たち祖母の実家のあった豊秋村行幸田で、春祭の「だいたい神楽」があるからと、老人仲間からの招待があり、青年たちがリヤカーで迎えに来てくれた。上機嫌で帰宅した父は、村人の素朴な歓待ぶりを、例のニーモラスな口調で語り、父の幼い時祖母に連れられて見てから、六十七年ぶりのお神楽だと、それに続く昔の思い出話などを、なつかしそうに語ってくれた。

× ×

父は毎日朝早く畑に出て野菜の手入れをし、庭の草を取り、大勢の孫たちが学校に行った後、私たちとゆっくり朝食を取り、一服して本を読みながら、早い昼寝をする。昼間に絵・書・手紙等を書いたり、来客に会ったりし、疲れれば敷き放しの床で横にな

る。夕方再び畑や庭を見廻り、夕食後子供たちが寝てから、落着いて私たちと話をしたり、謡曲を教えてくれたりするの、日課だった。

畑仕事などして汗になったシャツを、庭の池で洗い、石の上や庭木にひろげて干して置くのを私が気になり、井戸水で洗い直して竿に干しておく、父は氣に入らない。出来るだけ自分の事には他人の手をわずらわしたくない性質があり、また忙しい私をいたわる気持も十分にわかっていたので、それからは父の屋敷の間にそっと洗い直して、父の干して置いた庭に広げるようにした。一筆まめの父の、紙の工面にも一苦労した。煙草好きの父に、毎朝その煙草を買うのも一仕事で、妹たちは暇さえあれば、配給の「きざみ」を紙に巻き、箱に入れておいて上げた。

×

×

ある時思いもかけぬ卒業生の方々が四、五人、「伊香保へ会議で来たが、汽車の時間があつたので、先生のお顔を見に参りました」と言ってお寄り下さった。「やア君か、大分頭がはげたなア」「先生も大分白くなりましたね」など、玄関で大笑いしていた時の、父の嬉しそうな明るい顔は、めったに見られないものだった。

昭和二十年の秋、いくらか食糧事情もよくなった頃、群馬在住の卒業生の方十五、六人が、それぞれ材料を持ち寄って、家で昼食会を開いて下さった時は、本当に父は嬉しそうで、私たちも師弟愛の美しさに感激した。

×

×

終戦後はすべての役や講演等を一切断っていたが、昭和二十一年春群馬県選挙管理委員長を、名前だけでよいからと、無理に引受けさせられた。しかし進駐軍の管理は大変嚴重で、委員長は毎日出勤せねばならないと、やかましく言われた。まだ自動車も自由にならなかった頃なので、足の悪い父が毎日県庁に行くには、渋川・前橋間の超満員電車に乗る外に、方法がなかった。そこで私たちは毎朝一キロほど離れた始発停留所に先に行って行列に加わり、父の腰掛ける席を確保した。しかし帰途は、父には前橋駅まで歩けないので、県庁近くの停留所から乗るので、一時間近く満員電車に立ち続けなければならなかった。そのため見る見る疲れていくのがわかった。選挙も一通り終った二十二年七月、私どもは強引にやめてもらった。

×

×

毎年夏になると、汗ものひどくなる父は、昭和二十二年春だと言うのに、身体中汗もがかゆいと言って掻いていた。これは単なる汗もでないことに気づいた私たちは、医者に診てもらったところ、老人性痒疹と診断された。注射を続けたが、あまり効果がなく、温泉行きを勧められた。大連から引上げてまだ体の弱っていた次姉が付きそい、四万温泉に行ったが、父は退屈でたまらないと、一週間で帰って来てしまった。帰りのバスの中で左の耳が聞えなくなつたと言うので、直ぐ国立病院で治療してもらったが効果なく、とうとうその左の耳が聞えなくなつてしまった。家の

中では、父の耳が悪いのと、大勢の子供がうるさいことのために、私たちの声も自然に大きくなってしまい、家中で怒鳴り合っているようだった。お客様も大きな声を出して下さるが、それでも父は聞えないことが多く、困っている様子だった。不思議に私の声は聞えるので、来客の時はいつも私はおもてなしをしながら通訳をした。それでもわからない時は筆談だった。喜寿のお祝いにイヤホーンを頂いた。その後米軍放出物資の小さな真空管を入れたイヤホーンを、日本で作っていると聞いて、正樹は東京から買って来た。しかしそれも煩わしいのか、あまり使わなかった。

× ×

二十三年十一月初め、千曲会員の方々が中心となって、父の喜寿のお祝いを盛大に開催して下さった。夏の間から岡部弥平様・織田博様・橋本景吉様・浜井寿夫様方が、たびたびお見えになり、空襲で荒れた家の修繕など指図して、いろいろと準備を進めて下さった。

当日千曲会員の方々は、北は岩手・山形から、西は神戸・岡山あたりから、百二十人ばかり集って下さった。赤い座布団に坐った父を囲んで、厳肅な式があり、皆様のお心のこもった立派な毛皮の下着・ズボン下・ホームスパンのオーバー、さらに先きに述べたイヤホーンを下された。父のオーバー二着がこそ泥に盗られた後だった。酷寒に向う際の温かいお心尽くしは、有りがたかった。その後和やかな宴会があり、夕方から伊香保に大挙して向われた。「親爺に風邪をひかせてはいけない」、「親爺には柔らかい

ものを」、「親爺、々々」と大勢にいたわれ、教育者としての幸わせをしみじみ感じた、その日の感激をよく語ってくれた。

× ×

東京から戻って来た当時病氣だった義妹光子は、その後どんな恢復し、父の可愛い二番目の内孫も出来て、父を喜ばせた。しかし今度は妹美津枝が馴れぬ百姓仕事をしたなどの為か、結核になり、喜寿のお祝がすむと寝ついてしまい、父の心配がまた一つ増えた。亡妹貞子の遺児靖彦が父にはふびんでたまらないらしく、特別に目をかけていた。一家集団生活の中で、ともすれば一人で我儘を言うので、私が叱ると、父は「我儘の言えるところのある子は幸わせだ。言わせてやってくれ」と言うので、私には何も言えなくなってしまった。

× ×

「昭和二十四年四月二十七日大日本養老会から表彰され、皇太后陛下より恩賜賞を頂くことになったから、出席せよ」と言う意味の通知があった。引退生活に入ってから既に久しい父は、あまりにも思いかけぬことに、恐懼していた。しかしその時はもう汽車に乗ることも出来なくなっていたので、当日は正樹が代って出席した。翌日正樹は帰宅し、頂いて来た恩賜賞の三組銀杯とお菓子・煙草に賞状を、父に差出した。父は正座し押し頂き、皇太后様のお言葉を、感激の頬をこわばらせて聞いた。皇太后様は「針塚さん、長い間長野で活躍して下さいましたが、今はどうしていられますか」と、直接正樹にお聞きになり、老人になり足が不自由で参

られなかったことを申し上げると、「これからはゆっくり余生を  
 楽しむように。お父さんによるしく」との意味をおっしゃられた  
 そうで、正樹は胸が一ぱいになったと語っていた。

× ×

この年初夏の頃から、父はやせて、厚い座布団二枚敷いても、  
 お尻が痛いと言う。足もめっきり悪くなって、朝夕の庭の散歩に  
 は、長い杖をつき、大好きな畑の仕事もやらなくなった。「俺も  
 もう長くはないな」と言うので、私が「寝ていても口だけ動かし  
 ていてくれればよいから、長生きして下さい」と申すと、「そん  
 なになってまで生きたくはない」と、横を向いてしまった。

父は母の在世中から、時々心臓の結滞を起こし、肺炎にもなり  
 易かった。二十二年十一月下旬にも肺炎を起こして心配したこと  
 もあった。脈搏の結滞した時私が医者と呼ぶと、医者嫌いの父は  
 医者が帰った後「静かにしていればすぐ治るのに大げさな」と、  
 私を叱った。事実医者も「これは老人によくある症状で手当の方  
 法もなく、仰向けに静かに寝ていれば治るから、御心配はない」  
 と言われた。父も直ぐによくなったので、私もあまり心配しなく  
 なった。しかし正樹は薬の入手困難な時だったので、カンフルや  
 ビタミン・葡萄糖など、いろいろの注射薬を揃えて、万一にそな  
 えていた。

二十四年の秋九月十五日と十八日頃、肋間神経痛だと言って、  
 胸の痛みを訴えた。しかしその時も医者を呼ばせない。二時間ほ  
 ど寝た後「治った」と言って、起きて来た。九月十九日美津枝の

病状がよくないので、私が附添って江木（前橋市）の十全病院に  
 行き、入院手続を済まして正午過ぎに帰宅した。その時父は珍し  
 く胡麻たたきをしていた。私の顔を見るなり「後もう少しだが、  
 とても疲れて出来ないから、お前してくれ」と言って、寝てしま  
 った。夕方元氣になって、書きものをしていた。

× ×

九月二十一日朝父は何時になくはればれとした顔で朝食の膳に  
 つき、手打ちうどんと御飯を、いつもの倍も食べた。その日都丸  
 茂重氏の葬式に行く私に、前夜書いたらしい弔詞（口絵写真参  
 照）に香典をそえて「これを茂男さん（茂重氏の長男）にあげて  
 くれ、何時の汽車で行くか」と言われた。これが私への最後の言  
 葉だった。十時頃私が出掛ける時、父は氣持よさそうに早い昼寝  
 をしていたので、挨拶もしなかった。

午後四時頃葬式が済みホッとして、親類の家でお茶を飲もうと  
 した時、私の長男敬介が自転車で、父の死を知らせに来た。夢中  
 で家に帰った私は、出掛ける時に見たあのやすらかな寝顔そのま  
 まで、永遠の眠りについた父を見た。

× ×

家族の話によれば、父は私が出た後直ぐに起きて、表門の前の  
 草かきをしていたそうだ。そこへ隣村にいる父の妹がお彼岸参り  
 に来たので、父は地下足袋をぬいで茶の間に上り、叔母といろい  
 る話をしたすえ、「俺もこの頃痛いとこが出来たが、今日はと  
 ても工合がよい。字を書いてくれと言う人があれば、書いてやる

から頼まれて来な」「そうかい、それは有難い、幾人にも頼まれたが、兄さんの工合が悪い話を聞いていたので、遠慮して断わっていたが、そんなら早速紙を持って来るよ。みんな喜ぶでしょう」と言つた会話を交し、叔母は近所の親戚に行つたそうである。父も「一所に行く」と言うのを、叔母は「兄さんはおひる前だからおひるを食べたらいらっしゃい。速川（近所の父の亡妹の家）で会いましょう」と約束した。それから直ぐおひるを食べ始めたが、また「胸が痛む」と言つて、床についてしまった。二時頃敬介が学校から帰つた時、お手洗ひから出て来た父に廊下で会つたが、足とりも言葉も変わったことは無かつたそうだ。その時父の部屋の隣りでは、正樹の長女知子・私の次女妙子、それに晴彦等が、かくれんぼうをしていた。父は「上手にかくれろよ」と、知子と妙子を自分の布団の中にかくしてくれたそうだ。

x x

二時半頃光子が、父は御飯を食べて寝たので、お腹がすいたろうと思い、山羊の乳を絞つて持つて行き、呼んで見たが返事がない。よく見ると、よだれなどかつてたらししたことのない父の口から、少しよだれが流れている。唇の色が無い。はっとして脈を取つたが、それは既にとまつていた。医者がかけつける前に、近所の産婆木村テルさんが、カンフルを續けて打つたが、もはや何の反応もなく、父はお彼岸の日に、誰の手もわずらわさず、一人で逝ってしまったのだ。

人は大往生だと言う。しかし私は一日も看護することなく逝か

れたことを、子として申しわけなく思い、また限りなく残念でたまらない。

x x

母が死んだ時、父は私に「俺が死んだ時は、山登りの支度をさせ、坊さんは半田さん一人だけ呼んでくれ」と一言ぼつりと言つたことを、正樹に話し、父愛用の登山杖を持たせ、謡曲の本を棺に入れて、大雨の中を火葬場に送つた。二十五日自宅で、当時長野善光寺に奉職中の大僧正半田孝海師の読経で、極めて厳肅な葬儀が執り行なわれた。大勢の教え子たちに送られ、長い行列を作つて、父の遺骨は墓所に向かつた。

x x

あれからもう十三年、父の死の床に一緒に寝ていた愛猫ミーちゃんも、この頃は齒がなくなり、煮干も食べられずに、一日中日向でうずくまつて寝ている。よく来て下さつた岡部様、橋本様も故人になられ、私も心静かに孫の成長を楽しむ年令になった。あの頃の出来事は、目をつむると、そのひとこま、ひとこまが、浮かんでは消えて行く。感慨無量!! 父の追想録を出して下さる干曲会の皆々様に、厚く御礼申し上げ、つたない筆をおく。

(三女・故都丸晴治氏夫人)

## 祖父の追想

## 間庭愛信

祖父は、道を愛し、人を愛し、書を好み、しかも大地に住む人であった。孫として見、感じたことは数多く、様々な思い出がよみがえって来る。私達孫の祖父であり、師である。その薫陶を感謝している。

書生が好きで、自分の家は書生の巣だ、といつも言っていた。私が東京の学校に在学中の頃、二日続きの休日などには必ず訪ねたもので、色々教えを乞うのが最上の楽しみであった。「来たか、友達方より来る。また楽しからずや」と言つてニコ／＼迎えてくれたものである。茶の間で火鉢を前にしてキセルを以て煙草をすい、トン／＼とたたいていた様子が眼に浮かぶ。

書生だけでなく、どのような人にも愛を以て接し、それぞれに応じた話をしていた。論語、老子、菜根譚、碧巖録などについていつも話してくれ、泉のように尽きることがなかった。また十八史略などにより、色々な言葉の説明をよくきいたものである。

書をよく書いたことは有名であるが、人に応じた教訓のことばを書いて贈っていたと思う。私には中学時代につきの言葉をおくられた。

氣象要「高曠」而不「可」疎狂「

心思要「縝密」而不「可」瑣屑「

趣味要「冲淡」而不「可」偏枯「

操守要「嚴明」而不「可」激烈「

晩年は老子についてよく話された。水を例にひいての生き方、考え方を説明されたものである。昭和二十二年頃、次の句を手紙に書いて呉れた。

あるがままに見るより他はなきものを何をたづねて悟る積りか

今考えてみると、存在についての真理を端的に説明していると思う。ついで老子のつぎの句を書にして貰った。

善行無「轍迹」

よい教えであると感謝している。

戦後の混乱時代には世を嘆いていたが、いたずらに愚痴をこぼすことなく、いつも適切な指導をしてくれた。特に忍耐についてよく教えられたものである。そのような時代にもつぎの俳句は祖父の心境をよく表わしている。

夕立に洗ひ出されて夏の月

明月や幾興亡を照らしけむ

はじめて就職する時に何かことばをと所望すると、「誰にでも親切にしなければならぬ」と教えられた。なかなかその通りに実行できないのであるが、ひろい愛に立脚した立派な教えであると思う。こうして祖父の教えによって私の精神面の方針が導かれたものである。

公的な面における祖父の姿に接したことはないが、どこでもシ

ヤキシヤキと手まめに人のやりたがらない仕事をやっていた。学校の運動場の草を自らすすんで刈った話によく似たものである。七十過ぎの年令で肥桶をかつぐので、私が見つけた時は代わってかついだものである。私にとっては得難い経験である。肥桶・鉋、そして掘って来たいもなど一緒に庭の池でガチャガチャ洗っていた姿も眼に浮かぶ。

若い頃北海道を馬で歩いた話をよくきかせてくれたが、元気な時の様子が想像された。

山につれて行って貰った時は、いつも先に立って導いてくれたものである。そして種々の樹の名を教えてくれた。これらのことは私達に自然を愛する心を植えつけてくれたものと思う。小学生の頃、四阿山に登った時、夏の強い陽の為に水筒の水を飲み干してしまつたが、頂上で徐ろにりんごをとり出し、孫にひとつひとつわけてくれた時の嬉しさは忘れられない。

幼い孫には、カタカナとひらがなまじりの手紙に画をそえて書いてくれたものだ。孫は皆祖父を尊敬すると同時に甘えていたと思う。孫によくおどけて踊って見せていた。私が子供の頃「塩をつけてペロペロと食べてしまふぞ」といわれ「……ペロペロ」まできくと、私はブルブルとふるえたそうである。

孫を可愛がった一例として、私が幼い頃上田の家に滞在して帰ったあと、下駄を縁先に片方をひっくりかえして脱ぎすててあったのを、暫くの間そのままにしておかされたことがあるそうで、こうして多くの孫を皆愛し、したがって孫は祖父母のもとに仲よく、

助け合っているのである。

祖母、貞子叔母のなくなった時の悲嘆のし方は、私の知っている祖父のやさしさのあらわれである。

自由に活動できなくなった晩年は、益々漢籍に親しみを加えて行つたようである。私が訪れると、よく「一寝入りしろ」といい、自分も横になって読書していたものである。祖父は若い時分から猫を可愛がったので、祖父のいる所には必ず猫がいたが、最後に枕許に論語の読みさしをおき、猫を抱いて永眠したのは、いかにもその人柄を表わしていると思う。

以上、私が孫の一員として祖父の面影の一端を述べた。私の経験を中心にしたもので、沢山の孫を代表しているとはいえないことを遺憾とする。唯、祖父母を支柱として多くの孫がいつ迄も親しく助け合つて行きたいと希望することには皆賛成してくれることを信ずるものである。

(孫・水産庁漁船研究室技官 工学博士)

## 伯父を偲びて

——畑違いの私の目を通して見た伯父の一面——

松岡重三郎

伯父の風貌風格を其の時折の思ひ出をたぐり、歌によって浮き彫りにして見ました。果たして皆さんにどれだけ私の歌によって伯父の姿を彷彿して頂けるか、それは一に私の歌の巧拙にかか



っている次第です。

先ずそば好きの伯父を偲んで

秋の夜を虫を聴きつゝそばはみぬそば好きなりし伯父をしのびて

秋そばを味はふたびにおもふことそばずきなりし伯父の童顔

伯父の家にゆくと、よく紅葉屋とか云ったそば屋から出来たてのそばをとってもらった。うまいと思つたその味と、伯父の顔とは終生忘れられません。そしてそばをたべながら、伯父と象山のこと、東洋倫理・東洋哲学などを語り合つたものでした。

秋の夜をうま酒をのみそばを食ひ伯父とかたりぬ象山のこと

東洋の学にくはしき伯父なりき韓非老莊論ぜし日憶ふ

物を究む意慾たくましき伯父なりき東洋の道語りし日憶ふ

時々大轍りの書などをたのまれて大筆を振つた伯父であつた。

伯父の書は上手下手をのりこえて氣根躍動して迫力があつた。

大なる轍に振ふ伯父の筆墨痕淋漓氣根の躍動

伯父が書を書く時は、その風貌ふうぼうまことに無我であつた。

一筋に物に徹せるその伯父の書を書く時の無我の風貌ふうぼう

伯父は暇さえあれば人と語る時でも、人の話を聞く時でも、指

でもって文字かく練習をしていた。其の根のよきには全く敬服した。

暇ありて語り合ふ時おゆびもて常に文字書く稽古しをりき

伯父の刀剣、書画への愛着は深かつた。

新しく求めし書画に見入りつたため息もらす伯父の感動

今でも目をつむると書画の前に立つた不動の伯父の無我の姿がまざ／＼と浮んで来る。

抜きはなち名刀に見入る伯父の顔きびしきものをたたへし天眞

伯父は西洋の良さも十分確認していたが、所詮東洋に生れ、唐宋の詩を愛し、儒教に徹し、東洋の彫刻を愛した東洋人であつた。漢籍を好める伯父の風貌ににじむゆかしき東洋の皺

伯父は山を愛した。相当の年令になつても、若い者達と一緒にアルプスなどを踏破した。

知者水を聖者は山を好むと云ふ聖者にあらぬ山愛でし伯父

六十をこえてから竹亭さんと云う近所の画家について、日本画を本格的に勉強しはじめた。伯父は其の真剣さ熱心さにおいて、一緒に習いはじめた他の者の追隨をゆるさなかつた。従つて上達

も早く二年目頃には伯父独特の境地を開いて行った。勉強はやろうと思えば幾つになっても大丈夫と痛感したものだ。

日本画を好みて描くその伯父の無心の顔を今も忘れじ

謡曲こそは伯父が、生涯をかけて打ち込んだ修業であり愛好した道であった。

私が踏入の大きな樺の樹のあった墓地のそばの新築の、日当りの良い家を借りて住んで居た時、土曜日など午後早目に帰って、家の近くまで来ると、何とも云えない気持のよい謡の声が聞えて来る。ラジオかなと思つて来ると、あにはからんや私の家の秋の陽の一杯あたっている縁側に、伯父が腰かけて無心にうたっているのであった。

秋晴れの午后を帰ればわが家の縁に謡曲伯父のうたへる

うちこめば一筋にいきる伯父なりき生涯をかけし謡曲のみち

伯父の家の酒德利、そして盃は謡曲の仕舞いの絵姿・謡曲の言葉等が書いてある対のが多かった。始めのうちは、こんな盃のなかにどうしてこんなうまく文字が書けるのだらうと考えたものだった。

正月に伯父とかはせし盃の謡曲のことば今も忘れじ

伯父の酒量は問題にならなかった。一杯の酒に赤らむ程度だった。が酒の相手は上手だった。一度などは大掃除の後、酒の滅法

強い学生一人と私で大関を一本あげ、次に伯父のとおっておきのジヨニウオカー一本をペロリと平らげたことがあった。が伯父は終始愉快に相手をしてくれた。さすが私も其の日は、頭はしっかりしていたつもりだったが、腰をすくわれて自動車に乗るまでが大変だった。

只そばにかけては伯父は三役、私はやっと幕下位であつたろう。一杯の酒に赤らむ伯父おもふさはれ吾れよりそば好きなりし又伯父は動物を愛護することにおいては、人後に落ちなかったろう。伯父が行く所ではどこでも、見知らぬ犬などが尾を振つてなついて来たものである。

犬を愛し猫を愛せし伯父なりきまなこほそめて撫でしその顔意志の人実行の人さりながら犬もなつきておほらかなりき

以上思い出するまゝに書きつづりました。

(姪の夫・前橋商業高等学校長)

## 針塚先生と登山

井上柳梧

桃李物言わねば誰と共にか昔を語らんと、淋しい気持となることも度々ある。筆者已に齡八十有余、去る者は日々に疎しと謂う古語にもれず、記憶は日々にくすれて想い出すよしもない。信大繊維学部は昨年創立五十周年の祝典を挙げて校史上に一線を劃した今にして初代校長たりし針塚先生の想い出を記さざれば好機を失う憂があるので、病後の弱体に鞭打って想い出すままに記すこととした。

先生は非凡なる熱意を以て日夜学生の指導に当られたので、古い卒業生の中には多くの想い出を持たれる人々も多からんと思うが、学校以外の事柄で筆者の脳裏にきざまれて居ることにつき、二、三記して先生をしのぶこととする。

先生は大いに登山を好まれた。筆者も亦山がすきであつたため、たびたび先生と同行したことがあつた。

青蓮一去逸才稀 誰復登高能賦詩

世界三千帰掌握 鵬程九万可風追

人間草木未生処 天上神仙来会時

為報東西漫遊客 不攀大岳莫談奇

これは先生が登山に當つてよく吟ぜられた詩であつた。能く當時

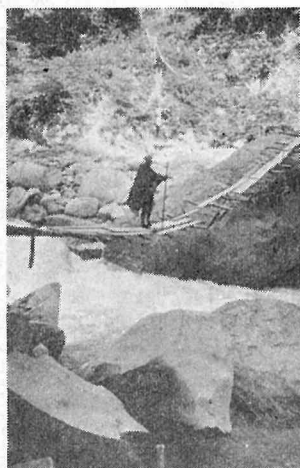
のアルプスの山頂の風光を唱うてある。

先生と登山した時は大正一五年頃から昭和一一年頃までの間で、二五年から四〇年程以前の事である。従つて山の様子は今日とは全く異つて居り、燕山荘など漸く出来たばかりであつた。先生は草鞋ばきで莫蔭に菅笠と謂う出立ちであつた。

先生は非常に健脚で何時も衆に先んじて先頭に立たれた。先生は学生に「身を挺して事に従い進んで難局に当れ」とよく教えられたが、山でも是れを実行せられた。写真(㉔)は北アルプス三嶽頂上の先生で、大正一五年八月登山の先生の勇姿だ。三八〇〇米の頂上花岡岩の大石の上に腰をおろされ、お山の大将我れ独りと、万山を眼下に眺め、大自然の氣魄に思うぞんぶん接せらるゝ処である。先生は又溪流の一本橋を渡られるのが大すきであつた。写真(㉕)は北アルプス高瀬川激流の、こわれかけた釣橋を平気で渡る處である。

世の中は何か常なき飛鳥川、昨日の淵ぞ今日の瀬になる、と古歌にうたわれたる様に、先生ゆかれて一三年、学校は全く変わつて昔の姿はなくなつてしまつた。吾々は此の機会に昔を追想し先生の懿徳を忍ぶのも大いに意義深いものと思う。

(元上田繊維専門学校校長 農学博士)



(b) 高瀬川のつり  
橋を渡る先生



(a) 三嶽頂上の先生

## ある印象

伊藤 武男

数多い駒場の大先輩のうちでも、針塚長太郎・山田玄太郎・鏡保之助のお三人は、大正から昭和にかけての農業系統の専門学校長として、特別親密な関係であったことを、私は盛岡高農在職の頃（大正八年以降）から折にふれて鏡校長からうかがっていた。だから、後年ゆくりなくも、上田織専に職を奉ずることになったとき（昭和二〇年）にも、創設者の針塚先生は、未だ面識こそなかったが、私にとってはまったくの未知のお方とは思えなかった。上田に来てからは、先生の「躬をもって教導する」教育方針について、いろいろのこを見聞したのであるが、直接お目にかかる機会は指を屈するほどしかなかった。それも大抵は短時間におわっているから、私にはこれといって、先生の思い出を語るほどの話題はない。

が、先生の喜寿のお祝いのため、上田の林教授等と昭和二十三年十一月渋川に向いて、広壮な、お宅に泊めていただき、温かいおもてなしを受けたことが思い出される。卒業生諸君主催の、先生喜寿の祝賀は、前年十一月に済んだ筈だが、自分は都合で出席出来なかったので、改めてこの年お祝いに上がったのであった。群馬県地方の卒業生諸君も多数集って、賀筵はお宅から

一キロ(?)位離れた処のさる料亭で張られたように記憶する。

師弟水入らずのなごやかな慶びの宴も了って、先生は機嫌よく帰路につかれたのだが、その頃、脚が弱っておられて、一キロの路の徒歩は困難とみられた。ところが、当時田舎のことだからタクシーなどは容易く呼ぶべくもない。が、じきに手頃なりヤカーがひき出された。恐らく往路にも使われたものであるう。それに薦を延べて、その上に先生が座られ、当時すでに農林技官で農學博士だった令息の正樹君が率いて行かれた。それはまことに滋味あふれる情景であった。見送りに出ていた人々は思わず拍手歓呼して、次第に去って行く後姿を飽かず眺め、仲々動こうとしなかった。この始終は私に忘れぬ深い印象を残した。

先生からは時折お便りがあったが、大抵はハガキで、末尾に身辺の御感想を託された短歌―狂歌めいた―がよみこんであったりした。が、学校について指示がましいお言葉をついぞ聞くことはなかった。総じて私には、先生が遠くから温かく見守っていて下さるように感じられた。

(信州大学長・元上田纖維専門學校長 農學博士)

## 書についての憶い出

石倉新十郎

上田の卒業生で今もなお針塚校長の書を所持されている人が少なくないであろう。卒業記念に書いてもらった色紙を始め、額面掛け軸から屏風まで揮毫されたのを記憶している。文字は草書が多かったが、行書も少なくなかった。晩年になって揮毫されたものは書の専門家がみてさえ称讃するほどの秀筆であった。ひまさえあれば指先で運筆の練習をし、閑談の時は聞きながら膝の上に指先運筆する癖がでるほどであった。

かように晩年の校長は能筆家となられたが、元來能筆の素質があったのではなかったようだ。実はあべこべに創立当時は学校職員中針塚校長と會計主任の池田書記の二人は校内難筆の典型人であった。公文書は庶務課の書記が、代筆したからよかったが、私文書となると誰かが判読に悩まされたものである。

その頃夏の或る日校長宅を訪れたら素裸で緊褌、新聞紙上に股がり毛筆を揮っているのをみて驚いた。「書の稽古とは意外ですなあ」「噫々暑い暑い!まあ一服休もう」と座って団扇を使うのであった。「世間は妙なものだ。僕に石碑の文字を書けと注文するものがある、いかに断つてもきかず、詮方なしの稽古さ」どうみても石碑に刻みこむような字になっていない。「どうです、これを見せたら大概諦めるでしょう」と、つい遠慮のない言がで

てしまった。「所がだめ、どんなでも良いから是非とも書けたから手に負えないよー」聞いて僕もただあきれて黙するばかりであった。

それから幾日かたって訪ねるとまた熱心に揮毫の稽古であった。みればまずいなりにもやや形が整い読める字になっている。「去華就実」の四字を横書きしてあった。「これは僕が戴きましよう」「今日初めて画仙紙に書いてみた。も少し稽古してからのにしてくれ給え」「これはあなたの処女作で、丁度出合った僕が頂く縁があるというものでしょう」と貰って帰り、早速経師屋に表装を頼んで額面に仕上げた。僕の新世帯の座敷にはこれでも無いよりまし位の考えで掲げたのである。其の後校長が僕の家を訪ねた時、この額をみて、「君は困ったことをしてくれたなあー書き直すからとり代えてくれ給え」「これはあなたの最初の作品で記念物です。是非といわれるなら止むをえず、譲りましようが、ただでは上げられません。少くとも二百円の値しますぞ」僕の顔を見て笑うばかりであった。其の時の僕の月俸は八十円で、校長の月俸は二百円したかどうかであった。

其の後数年つぎつぎに書の依頼者があり、校長の揮毫の練習は愈々熱烈となった。そして努力の効果も徐々に顕われ、校内でも蚕蠶供養塔やら道場、学生扣室などの扁額ができるようになった。校長自身も稍々安心気分がでてきた頃、僕の家を訪ねて、「これはまずい、君頼むから書き直させてくれ給え」と懇願の顔をした。「そうですか僕も諦めて手離しましよすが、今では値が上りまし

た。どうです、あなたの年俸位でよかったらあげましよう。」「弱ったなあー仕方がない、居間に置くだけで客間の方には出さないでくれ給え、頼むよ」と、苦笑するのであった。校長もこの額面には余程氣掛りであったとみえ、時々僕の家を訪ねると、「君あの額はまだあるのかね」と聞いた。「居間の方に依然として掲げてあります。あれは僕の座右の銘としています。」「去華就実には反省させられますね」で笑い合うのであった。

かようにして十数年掲げ通した額であったが、僕が教授を引退して講師と変わった時、校長の氣掛りを除く良い機会と考え、永い間見慣れたこの額を破棄してしまつた。思えば人の懸命な努力による研磨の成果はこれほどの偉大なものになるかと、唯々感嘆させられるのである。難筆で屈指の校長でさえ絶え間のない練習の結果は、晩年あれまでの名筆家に成り変わらせたのであった。

(元上田蚕糸専門学校教授)

## 文武両道

遠藤保太郎

とかく人間の性格は一方に偏し易いものであるが、其の点針塚先生には至極円満な智徳兼備の人格者で、しかも寛大の度量を有し、教育者として又統率者として最適任者であつたように思われる。幸い小生は大正四年以降二十数年間部下として御庇護を受け、多大の恩恵に預かることを得、実に感謝感激に堪えぬ所であつて、

御生前の思い出は到底筆紙に尽くせるものではないが、茲にその一端を記して先生の御遺徳を偲ぶこととする。

### 柔道のこと

針塚先生が学生薫陶のため武道を重んぜられたことは周知の事実で、特に剣道及び柔道の寒稽古には、自ら率先して道場へ臨席し、激励されたものだ。小生赴任当時の剣道部長は、腕に覚えのあるあの和田仙太郎教授で、誰しも当然と感ずるわけであるが、柔道部長には意外にも貧弱な小生が任命された。小生の長岡中学時代には、柔道部は無かったし、其の後も柔道を親しく見る機会が無かったので全くの門外漢であるが、強いて部長を任命されたのは、何か特別の意図があつたの事と思ひ、未だ年も若かったのでどうか数年間勤めさせていだいた。当時の師範は佐藤喜衛氏で、三佐藤の一人、「黒砂糖」と呼称された猛者であつた。その外中央から飯塚七段を名誉師範として招聘し、指導に當つていただいた。寒稽古は朝五時から初まるので四時頃起床して馳けつけないで間に合ふ。道場では一隅に端坐して、加納先生筆の「順道制勝」の大額に面し、学生諸君の稽古を見守るのであるが、中々寒い。部員の中には小林啓介(蚤四)・中尾小太郎(蚤四)・坂口良吉(糸五)・石塚浪之助(糸七)等の黒帯も居て、稽古は実にすさまじいものであつた。或る時は飯塚師範から柔道の秘術を伝授するから集まるようにと申し渡され、第一号蚕室の宿直室に導かれ板戸は固く鎖された。何が初まるかと皆が固唾を呑んでいると、片っぱしから羽交絞めにして落とすのであつた。順々に落とされて伸びたところを、師範が抱き起して背筋

の所を拳で突き、活をいれて再生させる。全く危険な秘術である。尤も其の時唯一人だけどうしたわけかいくら絞めても落ちないので、遂にあきらめられたことを憶えている。とにかくこうした秘術まで見せていただき、小生の一生に何よりの経験を与えられ、柔道に興味をもつことを得たのはもつちの幸いであつた。

### 謡曲のこと

開校後間もなく針塚校長を中心に阿形・和田・石倉・小沢等の諸氏によつて謡曲の稽古が初められ、羽衣会と名づけられた。謡曲の師匠は川中島近くの東福寺村高橋清輝という観世流の人で、堂々たる偉丈夫乍ら、極めて温厚の人柄であつた。稽古は毎月三十四日間、二―三人宛組になつて約一時間くらい教わるのだ。最初の間小生は佐藤利一氏と一緒に小袖曾我、竹生島唐船、紅葉狩と順に習つたが、後に清水寛孝氏が加わつて三羽鳥となつた。一方校長夫人を初め阿形夫人・石倉夫人それに荆妻を入れて婦人部というようなものが出来、羽衣会はいよいよ発展の緒についた。其の頃鷹匠町の阿形氏宅の二階で温習会が催され、針塚先生初め古参の方々は堂々と謡われたが、吾々初心者が突飛な奇声を発するので、余りの可笑さに堪え兼ね、阿形夫人が逃れんとした梯子段を踏みはずし、階下へ転ろび落ちたという珍事もあつた。

昭和の初めには高橋門下合同の謡曲大会が戸倉の清風園で開かれて、鼓・太鼓の囃しも入り、仕舞もあり、非常の盛会であつた。其の時集つた百数十名の中、羽衣会の面々は針塚校長・阿形教授・同夫人・石倉教授・同夫人・早川教授・佐藤利一教授・清水教

授・小沢書記・小林九十九氏それに小生共夫妻の十二名であった。

昭和七年五月五日には、東福寺村の高橋先生御生家の庭前に、先生の頌徳碑の建立式が挙行された。頌徳碑は丈余の仙台石に刻まれ、碑文は針塚校長の撰、小沢書記の書で実に立派なものである。其の節参加した羽衣会員は針塚校長・同夫人・阿形教授・同夫人・石倉夫人・早川教授・清水教授・小沢書記・速藤及び同夫人の十名であった。其の年七月高橋先生の斡旋で羽衣会の主な人々は、観世左近師から九番習免状を頂戴した。それから数年高橋先生逝去の後、東福寺小学校で追善謡曲大会の催しがあり羽衣会員一同も参加した。

針塚先生が謡曲に熱心であられたのは、高尚の芸術を学ぶというご趣味からであろうが、又各職員間及びその家庭の交際を増進し融和親睦を意図されたものようであった。

**書画のこと** 針塚先生はいつも校長室の脇掛椅子に身を寄せて巻紙を左手にささえ、毛筆をもって手紙を書いて居られた。何の屈託もない書き振りで、文字は自由に躍動しており、見る者をして一種の近親感を起こさすものであった。時には卒業生諸子の所望に応じて、類面の揮毫も快諾されたようである。

晩年には南画を練習されたが、小生が文芸部長の時「蘭の図」を一葉乞うて校友会誌の口絵に出したことがある。其の原画は私が頂戴して今も大切に保存している。

昭和十七年渋谷町に御新築の御宅へ、小生は家内を伴って訪問し、奥様御逝去のお悔みなど申上げたが、恰かも物資不足勝ちの

折柄、熱い牛乳に砂糖を沢山入れておもてなしいたご恐縮したことは記憶に新しい。其の後大戦争のため殆ど御無沙汰となったが、昭和二十四年九月御逝去の十日程前突然先生から一個の部厚い小包が送られて来た。何物ならんと開いて見たら小室翠雲著南画鑑賞録という南画の御手本であった。恐らく先生は御最期を予測され、形身分けの意味で私に賜ったものであらう。最後までお氣に留めて頂いたことを深く感謝し、何よりの記念として愛蔵している所である。

(元上田蚕糸専門学校教授 農学博士)

## 人間味を基調とした名校長

佐藤 利一

**初対面の印象** 何事によらず最初の印象は既得觀念に捉われないので、比較的正鵠敏感で、且つ批判的なものである。私は大正五年十一月上田蚕糸専門学校に赴任したのであったが、針塚先生は初対面の私に対し、旧知そのものの、儀礼抜きの温かい態度でお迎え下され、話題も八方に飛んで花が咲き、時に呵々大笑された。実に明朗快活で理解や判断も早く、人情味も濃やかで、威容の校長ではなく、親しみ易い人柄であるという印象を受けた。

その後まだ月も浅い翌大正六年正月二日午前十時頃私の下宿玄関先障子越しに、大声で「佐藤君居りますか、何をして居りますか」と呼ばれたので、見ると和服に袴という正装の、針塚先生の



御来訪だ。驚いて「只今書初めをして居ります」と答えると、「それは丁度よいところに来た、私も書初めをさせてもらうかな」といわれて、私の部屋に入り、御丁寧な新年の御挨拶の後、早速額面二枚に揮毫された。始めて見る先生の雄渾極まりない大文字だ。これは家宝として、今なお秘蔵している。先生は辞去の際下坐にかわり、「大麥お邪魔をしました」と、いとも入念に御挨拶された。この時改めて針塚先生が礼儀正しく、上下の別ない庶民的な人であることを痛感した。この「礼節を重んぜよ」ということは、先生一生を通じて、身を以て実践され、又訓示としてあらゆる機会に繰返された。

**ストライキ** 大正七年二月養蚕科一年生約四十名が結束して学校の現状を不満とし、大改革の必要を痛論して針塚校長の責任を追求し、その善処を求めてストライキを起こした。これは学校の現状に対する学生側の誤解と錯覚とに原因するものであったが、学校側及び卒業生有志の懇切な説得により、約一週間で解決した。このスト参加学生に対する処罰は、短期停学で済んだ。教授会では軽過ぎるという意見も多かったが、針塚校長の強い意見に従ったのである。この不祥事はたとえ学生側の誤解による軽率盲動とはいえ、学校側にも全然責任がないとは言い得ない。この意味において学校の歴史に一汚点を残したものであり、針塚校長三十年の在職中唯一の黒星と言わねばなるまい。

**教授の陣容と教授会の運営** 針塚先生が上田蚕糸専門学校の創立委員長となり、その校長として赴任されたのは、年齢不惑に達し

ない青年時代だった。通常新設学校の教授陣は、既成の權威ある教授を中軸とし、未成品の若い教授を副的に加えるのを常としたが、青年校長針塚先生は、既成教授を僅かにとどめ、大部分は将来の成長を期待し得る少壮有為な人材を採用し、それ等の研究費や研究施設に深く意を用い、一面なるべく早く欧米先進国に留学させる等、各方面から研究の便宜を計ったので、教授陣の研究意欲が大いに上がり、学位を得るもの相次ぎ、その数は専門学校中最右翼級に達した。

従つて、創立後数年間は、野性的に元氣のよい教授もあつて、教授会など、議題によつては、議論沸騰、卓をたたいて怒鳴るもの、又は灰皿を投げる等の活劇もあつて、針塚先生も相当手古ずつたらしいが、私が教授会に参加した大正六年以後は、如何に重要議題でも、こうした応酬は一度も無かった。意見が鋭く対立しても、議長としての針塚先生の態度は、話合ひで決めるよう最後まで努力し、どうしても一致点を見出し得ない場合は、宿題として更に検討を続けることを常とした。この点について私の関係した一例を挙げよう。それは教授会において、外国語を英語一科目にするか、従来通りドイツ語と英語の二科目制とするかで、議論が分れた時である。私は一貫して二科並施設を取り譲らないのに対し、多くの教授は「二兎を追う」の愚と称して、これに鋭く反対し、英語一科制を強調した。決を採れば当然私の負けだったろうが、議長針塚先生は私の主張を無視せず、決定を一年延期することとし、満場の納得を得た。然し翌年の教授会でも前回通りの

論議が繰り返され、依然両論の一致点又は一方の譲歩も見られなかった。それでも議長は決をとらない。そのうちに妥協案が出た。それは三学年生に英・独・仏の三国語中一カ国語を選択させて、それを正科目とすると言うのだ。二年間にわたる論議も、これで妥結し、その結果ドイツ語は私が担当することになった。この問題の議長振りは、文字通り初め処女の如く、終わり脱兎の如く、一同長時間の会議に飽き、議論の出尽くした頃を見計らって、一気にまとめた鮮さは、今なお忘れられない。後年ドイツ留学中自分の学位論文を独訳して、ツェントラル・ブラット誌に載せてもらったが、それはドイツ語担当による語学の復習が、大いに役立ったことであつた。

**挺身従事** 針塚先生は慎重審議の上、目的を決定すれば、挺身従事、必ずこれが達成実現に邁進された。よく先生が訓示・揮毫等に用いられた流汗鍛錬・実践躬行・努力主義・一事貫行などの語は、この「挺身従事」と同意語である。これは校風の基盤ともなったもので、校歌にも「身にしむ汗は世を救ふ深き情の涙にて」とあり、卒業生の社会活動には、それぞれこの精神の滲み出ているのを、多く見受けられる。私も能くこの精神を体して、努力精進を続けて来たが、針塚先生退職後図らずも、この主義を実行すべき二つのチャンスに逢着した。一つは米沢工業専門学校から受けた紡機の返還問題であり、第二次大戦中の出来事だ。文部省からは全部の返還を命ぜられたが、私の挺身従事・捨身の頑張りが効を奏して、半分だけ返せばよいことになった。次ぎは終戦後の

学制改革に伴う単科大学昇格問題だった。交渉の相手は、長野県下の国立医科大学・各種専門学校・県当局・文部省・大学設置委員会・進駐軍・国会等、極めて広範囲に亘り、運動期間も一カ年以上に及んだ。その間趣意書・陳情書・運動願末書など、すべて自分で書き、最悪の交通事情にもめげず、悪戦苦闘を続けて、つぎつぎと難關を突破することが出来たが、遂にもう一歩と言うところで、不成功に終った。顧みて微力の致すところではあったが、終始針塚先生の挺身従事・一事貫行の精神にもとらなかつたことに、今なお秘かな自負を捨てない。

**限りなき温情** 針塚先生は徹底した温情の持主であり、校内には常に先生を中心の温かく香り高い校風が漲っていた。この温情は草木や動物にまで及んでいたことは、衆知の通りである。

例えば私が学校の研究室で飼っていた猫を、私の留学中二カ年余の間、針塚先生が飼って下さったことである。私は当時灰色の仔猫を学校で放し飼をし、毎日私の弁当の半分と牛乳一合を与えていたが、兎その他を捕食するので、肥っていた。先生は猫が大好きでときどき見に来られ、「これはシャム猫に似ているから、シャムと命名し給え」と、名付け親になって下さった。野性味が抜けず、自宅に連れて行つたこともあるが、家人になじまず、直ぐ学校に逃げて帰った。留学の出発も間近くなり、シャムの処置に迷っていたところ、校長から「君の留学中シャムは私が飼つてやるから、心配せずに行つて来給え」とのお言葉があったので、その御厚意に甘えることにした。校長はシャムを製糸科の小使室

おこの秋山氏顔面は石倉新十郎教授の自作寄贈品であることを書き添えて置く。  
(信州大学名誉教授 農学博士)

## その徳植物・禽獣にも及ぶ

佐藤 春 太郎

に托し、私の飼い方と同じく一日一食御飯と牛乳を給与して下さったことだ。私が留学から帰って来て、「シヤム、シヤム」と呼んだら、「ニヤン、ニヤン」と遠方から飛んで来て、私の足に肩をすりつけ、「ゴロ、ゴロ」と喜びの喉を鳴らして離れなかった。後の話になるが、針塚先生御逝去は突然の心臓麻痺で、家人のどなたもが枕頭に待べる時間が無かったのに、愛猫が同床していたと承り、感慨新たなものがあつた。

又終戦後全国専門学校校長の大異動のあつた際、御郷里群馬県から、先生の至急親展書を頂いた。それには「君を或る学校の校長に推薦したいから、折り返し履歴書を送れ」と言う意味が述べてあつた。然しその時の文部省の異動方針は、敗戦後の気分一新を主として、全国的に学校間の交流を計り、年齢は五十五才以下と内定していたそうだから、私には資格が無かつた筈だ。私はその器でもないし、謹んで御辞退申し上げたのであつたが、先生の御懇情には感泣したことを忘れられない。

先生在職中、学校創立二十五周年の式典に際し、卒業生が中心となつて、先生の等身大銅像を、旧館前の庭園に建造した。作者は巨匠石井鶴三氏であつたが、大戦中国難に赴いて玉碎した。今はその同じ場所近くに、やはり石井氏作の先生胸像が据置かれてゐる。その前方約十五米のところに、先生在職中の模範巡視で、古武士の面影のあつた秋山義行氏の顔面像が、石柱の東面にはめ込まれて、先生の胸像と相対し、先生の慈愛溢るる温眼が秋山氏を見守っている。昔を知る人達の感慨を新たにするのである。な

今日の信州大学繊維学部の前身は国立上田蚕糸専門学校であつた。針塚先生は文部省御在職時代から、「我が国産業の中心は蚕糸業でなければならない」と深く主張して居られたので、斯業最初の専門学校創立に当り、その初代校長に推挙せられたので、先生は一生涯のお仕事として、御赴任されたと聞く。そして校長の職に就かれるや、常に部下を率いてその先頭に立ち、自ら鋏を振つて桑園・圃場の開墾整備に当り、或は山野を跋涉して各種の苗木を採集せられてこれを校庭に移植し、将来の計を立てられた。今日校庭に亭々として茂る一木一草は、当時の先生の、こうした汗の結晶が成長したものである。かつて米国人の教育指導者が当校を視察された時、校庭に鬱蒼として茂る幾多の樹木とその配置の妙を眺めて、「信濃路に入り始めてこの上田で大学らしい風格に接することが出来た」と、当校を激賞したことを思い出す。これ偏に先生の草木を愛撫された御性格の致すところである。

先生はまた運動場の除草を学生等と共に、シャツ・ズボン一枚になつて、よくなされた。炎天下自ら鋏を振るつては流汗淋漓、

そのさばき方、速さなど、われわれ若いものの、到底及ぶところではなかった。

又先生の登山は有名だった。同行された故樋口琢磨（蚕五）さんの話では、先生は常に一行の先頭に立たれ、道なき灌木帯の中に入り込み、小枝を分けて一見乱暴に見えるが如くに突進され、途中栗の実など発見されれば、直ちに食される有様は、全くの童児・自然人であったと言う。

我が校には創立以来一貫したモットーがある。それは「進んで難局に当り、挺身事に従え」と言う信条である。これは全く先生の実践躬行から迸り出たものであった。それだけわれわれの心身に力強く響いたのである。又一方に於て家畜・動物なども大いに慈愛された。当時拙宅には数匹の猫が居ったが、先生が御来訪の際には、常に先ずこれを抱いたまま二階の客間においてになり、猫は目を細くして先生にこすりつき、そのまま眠ってしまうこともあった。全く「徳禽獣にも及ぶ」とは先生のことであった。

養蚕実習時には、昼間は勿論夜分にも、よく蚕室を廻られ、われわれ教師や学生を憐れられた。先生の御訓話の一節に「草木を見よ、そしてその正直さと作為なきを学べ」と言うことがあるが、この言葉は今なお脳裏に深く刻まれている。

先生は一方に於て友情に極めて厚い方であった。一友人が突然死去されて、その遺族の方が糊口にも窮する様になった際、先生は養蚕の本を出版する計画を立てて、幾夜も徹夜するほどの努力を続け、その印税を贈ってその生活を支えられたこともあったと、

伝えられる。

先生は好んで謡曲をやられた。先生の謡曲には気品が具わり、しかも曲の中に溶け込んでおられた。特に渋いものを得意とされた。或る日石倉新十郎先生の宅に謡曲の会があった。その時針塚先生が突然私の側に來られて「僕は一生の間に一人の謡曲の弟子を持ちたい、その人は佐藤君、君だよ」と仰言った。私はびっくりしたが、御冗談と思ひ込んでおったところ、その後雨の降る夜飄然來られて「今夜は先日の約束通り謡曲を教えに來た」と申され、早速「松風」の一節をいくさりやられた。これからは週に二回位ずつ來るようにと言われ、お使いを受けた。この弟子の中に行元（自忍）先生・志賀（章雄）先生が参加せられ、都合三人で松原町のお宅に伺った。三人中一番上手なのは、行元先生だった。

針塚先生の謡曲教授法は、細かい点には殆ど拘泥せず、大局を掴むことを主眼とされたらしく、一回に一冊の割で急速に進んだものであった（冊数だけだが）。今も脳裏の奥深く残っているのは、「景清」の中の「老ぬれば驚馬に劣る如くなり」のところまで來ると、「今日はここまで」と申され、その後をボツと止められてしまわれた。長野市に親世宗家が能楽の為に來られる時には、大抵お供をしたが、その際には、「この本を予め読んで置き給え」と、細かい親切なお心遣いをされるのを常とした。

又先生は書画・骨董・刀剣類に興味を持って居られた。今も学校にある屏風は、明治維新の俊傑山岡鉄舟の書であるが、その字は読みにくいので、先生はそれを一片の紙に楷書で書いて、屏風に

添付して下さった。先生は時間があれば書画を掲げてこれを賞翫され、これによってその人物に触れることを楽しみにして居られた。又秋水滴たる日本刀の鞘を払って眺めていると、気分が爽快になると申された程、刀剣を愛撫された。卒業生や学生が戦争に出発する際御挨拶に伺うと、その愛刀を惜し気もなく贈って、その行を盛にされた。ここで思い出したが、戦争になるか否かで、世論囂々たる際御来訪されたので、御意見を伺ったところ、米国の工業力特に造船力や富の力を詳細説いて、今日米國と戦争しても勝目がないから、十年臥薪嘗膽すべきだと力説された。然しその翌日対米宣戰布告があつて愕然とした。

先生は柔剣道を奨励された。その寒稽古は酷暑の候三週間行なわれた。午前五時開始だが、先生は三十分間位早く出席せられ、よく服を脱ぎ道場の真中で徒手体操をしておられた。柔道の名誉師範には飯塚国三郎先生(当時九段)を招聘されていたが、多忙な飯塚先生も上田に来て針塚先生にお会いすることを、非常に楽しみにしていたと聞く。私もこの両先生の席に侍ったことがあるが、お二人とも話題が非常に広範で尽きるところがなく、私ごとときも啓発されるところが多かった。先生は大学時代鈴木梅太郎博士等数人のお友達と、渋谷で自炊生活をなされ、そこから小石川の講道館まで徒歩で通われたとのことである。

私が校長室に伺うと、先生は多くの場合手紙を認めておられた。先生は手紙が来れば先ず筆を持って然る後に開封するという主義であつた。そして誤字があれば、これを訂正し丁寧に認めて送り

返された。

先生は又座談が非常に巧みで居られた。何気ないお話の中に貴い教訓が籠り、お歸りになって後も、長く余薫を残された。漢詩に御堪能であられたのは衆知のことだが、和歌や俳句・川柳もよくなされ、いずれも胸打たれるものが多かった。

凋落の最後を飾る晴着とは知るや知らずや紅葉見る人

。札束が議員に化けて躍り出し

などもその一例である。

たとえ先生は御他界されても、その御教訓・その御精神は、われわれ教官・卒業生の胸のうちに、躍如として生きて居て下さるのである。

(信州大学名誉教授 農学博士)

## 針塚先生と大森博士

北 島 鉞 雄

大森順造博士は針塚先生と東大農科大学農学科の同期生であつた。学校卒業後大学院に留まって蚕病の研究をやられ軟化病論で学位をとられた。その後盛岡高農へ教授として赴任された。それは日露戦争の直前か戦争中のことであつた。その当時養蚕学で学位をとられたのは大森さんと外山亀太郎博士の二人きりであつた。尤も沢村真博士も軟化病論で学位をとられたが、同博士は家

畜養養学専攻で、軟化病論は学位論文の一部をなした附随的なものであった。

この大森・沢村両博士は殆ど時を同じうして同一軟化病論で、而も一方は軟化病を伝染病だと唱え、他方は伝染病でないと唱えて、双方とも学位審査会を通過したのだからたまらない。世論も承知しないし、本人たちも承知しない。大森博士から先ず挑戦し、沢村博士之に応じて、蚕業雑誌上大論争を繰り返し、一〇回近くに及んだと記憶している。これは当時蚕業界だけでなく広く一般学界の注目する処であった。

大森博士はその後の研究を追加されて「最近日本蚕病論」と云う膨大な著書を出版され、上田の学部図書館にも所蔵されておる筈で、第一期・第二期あたりの卒業生諸君は耽読された処であった。

明治から大正初期にかけては学位号所持者は甚だ少なく「末は博士か大臣か」の歌の文句にある通り、博士は当人の荣誉であることは勿論、世間でもその稀少価値を認めて、尊敬したものである。上田蚕糸専門学校がその創設に当り蚕業界に二人しかない博士の一人を教頭として迎えたことは新設学校の権威の上からも、校長として万難を排してやりたい処であつたろうと思う。今日から見れば隔世の感ありだが、針塚先生と大森さんが学校の同期生であつたと云うことは、両先生の呼吸がピッタリ合う場合は学校の運営上鬼に金棒であるが、そうでない場合は動きのとれなくなる危険が多分にあつた訳だ。

針塚先生はその後勝木喜薫さんにも随分手古ずられたが、勝木さんは校長よりはズット後輩で、校長には一目も二目も置かねばならぬ立場にある。その上その時分東大農学部教授に原(鰐)先生と云う針塚先生とは親友で、勝木さんや私どもには悪い先生がおられた。勝木さんは此の先生に呼び付けられて、小言を食つたことが度々ある。私はそれを勝木さんから直接聞いておる。また三吉米熊先生も居られた。針塚先生が勝木さんに手古ずられたと云つても、そこには大いに余裕があつた筈である。

沢村博士との論戦により大森博士の人柄の一端を窺い知られる如く、また盛岡高等農林在職中当時の同校校長が大森さんで手古ずつたと云うことは、文部省内にも知れわたつておつたようだ。上田蚕糸開校と同時に発令になった勝木さん・川瀬惣次郎君、また当時外国留学中の井上(柳梧)さん、何れも東大を出て間もないので、学界の権威者に生長するには尙数年を要する。性格の上に缺陷のある大森さんを百も承知の上で、自分の配下なり、片腕として迎えることは、校長として熟慮に熟慮を重ねた上のことであつたろう。

大森さんが外国留学を終り、上田に着任したのは、詳しい記憶は無いが、多分明治四十五年であつたと思う。勝木さんと大森さんの関係は、勝木さんの外国へ出発後に大森さんが帰朝され、勝木さんが留学を終つて帰校した時は、大森さんは既に退職されおり、両氏は顔を合せることが無かつた。勝木さんは大森さんに更に輪を掛けた激しい気性の持ち主、両氏が揃つて養蚕科に勤められた

らどんなことになったであろうか。勝木さんの独逸へ出発後は担当の遺傳学を当時東大大学院で柑橘を研究中の田中長三郎君が講師としてやって来た。田中君は高等学校(旧制)・大学とも私の一年先輩、非常の秀才で尋常にゆけば恩賜の銀時計組であったが、大学の途中で病氣をされ長期にわたり缺席その他で東大の卒業時の成績はそれ程優秀なもので無かった。大阪の富豪の家に生まれ多趣味で円満、肌触りもよく養蚕科学生間の評判は満点であったと思う。そこで私は上田蚕糸では先任であるが同君には常に目置き、何事も隔意なく意見を交換して行動を共にした。

偕て話は再び大森さんに戻るが、田中君や私達若輩の眼に映る大森さんは、そんなに角のある人とは思えなかった。蚕病研究室や自宅に訪ねても、温厚親切な小父さんとしか見えなかった。沢村博士の軟化病論を持出してニコニコ笑いながら、静かな調子で話して下さる。決して激しい様子は見せない。之は直接自分の輩下であると言う眼で見えるからであつたろうが。またそんな時大森さんが校長の悪口を云われた事も記憶に残っていない。

然るに教官会議の席上などでは一旦言い出したら一歩も退かぬと云う風があった。校長室なり或は私宅で校長と大森さんがどんな態度で話したかは、我々全然窺い知る由もない。我々の知り得る範囲は、教官会議の席上での問題であるが、最も激しい場合は茶わんを床に叩き付けたこともあった。面白くない空気が漲ったり、或は何か事件の起こった時には田中君と二人が相談して、その晩大森さんを自宅に訪ね、昂奮された大森さんの気分も幾分

なりと和げることにとめた。効果があつたかどうかは知らないが、そんなことは一再に止まらなかつた。針塚校長は非常の心労で夜安眠が得られなかつたとか聞いたが、どうにもならない。

最後の場面は大正三年(?)二月か三月の学生の卒業進学を決める会議であつた。会議事項は多数教官の賛同を得て決まつたが、大森さんは之れに承服せず、決議に責任を負えないと云つて、席を蹴つて立ち、直ぐに辞表を出したと、後から聞いた。それは三回目の辞表だつたそうだ。校長は遂に意を決し、その日の夜行列車で上京し文部省に報告して処断を仰いだと聞いた。その結果かどうかは知らぬが四月に入ると早々大森さんに休職の辞令が発せられた。

大森さんは上田を引上げられ、一時は千葉県下に住居されたと聞いたが、その後は世に出ることが無かつたようである。

拙者は大正十年迄上田に在勤、外国留学を終えて帰国後は鹿児島高等農林校に転任したからその後の上田のことは知らないが、針塚先生としては大森さん問題が一番頭を痛められた事件では無かつたかと思われる。

針塚先生追想録と云うから、先生の頌徳録のように受取れる。

此の拙文は先生にとつては、後味の良いものではない。頌徳録と云うには合致しない。さり乍ら針塚先生として人間である。長い一生の間には失敗談や寝ざめの悪いことが一つ二つあつてよい筈である。先生が此の拙文を見られたら、苦い顔をされるであろうか。然し實際は、そんなこともあつたなあとか大々大笑されるに違ひな

いと思う。

(元上田蚕糸専門学校教授 農學博士)

## 御訓諭は伝え伝えられる

古 谷 栄 蔵

先生逝かれてもう十二年たった。確かに十年の昔に此の世を去られて、もはや声咳に接することも、あの元気なお姿を見ることが出来ぬ。しかし吾々の心の奥底からは、先生の見えないことは片時も無い。吾々の心の中では先生ははつきり生きて居られるのである。鴨長明の方丈記には「且に生れ夕に死すならひ水の泡にぞ似たりける、知らず生れ死する人いづこより来りいづかたへか去る」とあり、又「生者必滅会者定離」とはよく言われていることで、これは生物たる吾々の約束事であり、尋常当然のことでも何とも致し方がない。しかし見方をかえて考えてみれば、仮令如何に永く生きても、空々寂々為すなきに於ては、單に息をして居る動物で、むしろ生まれざるに如かずではあるまいか。之れに反して死するもなお死せずして、永く不朽に生きながらえている者がある。愈うに生死は人生の常事で、それがために漫りに悲しみ漫りに喜ぶにはあたらない。要は生きて何事をなし、又死して何物を遺したかのことにしかかっている。勿論その有形たると無形たるとを問わない。これあるがため人は万物の靈長たると言われる所以であらう。

先生は明治四十三年に令名高かった文部省視學官から、この上田蚕糸専門学校の創立校長として赴任せられたのである。當時田畑原野であった常田の地を學校建設の敷地として工事にかかれたのだから、その御苦勞はなみ大抵のことではなかつたこと想像に余りある。而も我が國始めての蚕糸業最高の専門學校とあつて見れば、教職員の勢揃いや生徒の教育・校風の確立振興など何れも大事業で、先生の日夜心魂を傾倒せられたところのものであらう。就中學徒の育成はその最なるものであつたことは言うまでもない。先生は日常の挙措一投足に至るまで範を垂れられ、又身管理官でありながら週何時間かは特定の教授服に威儀を正して教壇に立ち、大義公道を説いて勤勉力行、事に當るべきを諭し、個人の完成、校風の振興に力められたのである。ために幾年ならずして、上田専門の声名は天下に響き、卒業生は其の所を得て存分に驥足を伸ばし得たのである。

先生は旧駒場農學校の出身なるも、儒學の造詣も頗る深く、いつ勉強せられたるにや全く敬服にたえない。孔孟の教えから銘句をとらえ諄々と説かれたのである。言う勿れ「三千年の昔のこと、今何の値するものぞ」とは、之れ偏狹者の囁言に過ぎない。真理・善言は千古不滅である。現に釈迦も耶穌も正正生きて居て、其の片言隻句も吾等の生命のよき糧となつて居るにあらずやだ。先生の説かれたのは主に大義・公道・信義・廉恥・友愛・勤勉等の徳目に関するが多かつた。先生はただ説かれたばかりでなく、先生ご自身の日常生活・挙措に於て実践垂範せられたので



ある。余も亦生徒主事在職の時の如きは、毎日のように先生に面接する機会があつて、折にふれお教えをきき、また陪聴して、いたく感銘したものである。そして「進而当難局」とか「挺身従事」ということは、常によく言われたもので、先生の筆に成る此れ等の扁額懸軸は今なお各所各家庭に掲げられてあり、その書風は円満・真摯・闊達で、先生のお人柄をよく現わして居る。それを仰ぎ見るとき、先生に直接おあいする心地して低徊しばらく去る能わざるものがある。又校庭に石井鶴三氏の作に成れる先生の寿像があつたが、戦争のため供出せられて今は無く、ただ台石のみ寂しく残つて居るが、時に庭前を通るとき台石上椅子により筆もて何か書いて居られたあの先生の温容は、彷彿として眼前を去らないのは、不思議というほどである。

先生はまた心身鍛錬のため柔剣道を奨励せられた。常日は時折道場を覗かれる程度であつたが、恒例の寒稽古時は毎朝零下十幾度の曉風を冒して、三週間の長きに亘り、率先出席せられて端坐し、生徒の一進一退の熱戦を凝視して、無言のうちに督励せられたのである。此の時の先生の威容は、今なお彼等の眼底に焼き付いてゐるであらう。又夏季には運動場の除草整理を全校職員生徒で行なうことがしばしばあつた。この頃先生は相当老齡なりしに拘らず、率先して下衣一枚となり、炎天下に双幡鉞を振って、流汗滝津瀬をなすも、更に厭わるゝ気色もなく、精々事に従われるのが常で、吾れ等若き者共が却つて辟易せざるを得なかつた。此れ等一、二の場合に限らず、何事にもかく無言に範を示して居られ

た。全く崇高なるお姿である。

嗚呼我が校に高邁有為なる人材の輩出したるは、先生の如き偉大なる指導者を得たるに因ると言うべきだろう。なお先生の余徳は幾百幾千の先生の訓諭に徹したる人々により、伝え伝えられてその止まる所を知らぬであらう。(元上田織維専門学校教授)

## 針塚長太郎先生の憶い出

半田孝海

学徒天国を作り上げた功績 私は大正九年八月二十六日、校長針塚長太郎先生の要請で、国立上田蚕糸専門学校(信大織維学部的前身)の講師を囑託された。それから昭和四年七月二十日に天台宗教学部長として滋賀県坂本の宗務庁へ転任する迄の十数年間、修身科を担当した。校長先生は初年級を、私は二年と三年の生徒の受持ちだった。私が主に西洋の倫理学概論を口述していたのに引換え、先生は夙に孔子や孟子の高潔な人格を尊敬しておられたので、自然講義は東洋の道德、特に論語とか孟子にあらわれた儒教思想に重点をおいて、専ら生徒の人格陶冶に力を尽されたのである。もとより論語読の論語知らずは、先生の断じてとらざる処であつた。とにかく先生の教化がはずかつて、

「御国の為にますらをが、蚕糸の道を究めつゝ、夜を日につける労働に、身にしむ汗は世を救ふ！」

と校歌の言葉(第一、二)そのまゝの人材を、幾多世に送ること

が出来た。この種の専門学校として、名実共に日本の第一位を占めていたことも蓋し偶然ではない。

私は本校の入学式や卒業式に列した際、校長先生が生徒の本分につき、或は就職先の細かなエチケットにまで、慈父の様な厳格さと悲母のような慈愛とを以て、淳々と訓誡されて居られるのを傾聴し、頭が下がる思いをした。当時本校を慕う入学志望者が逐年激増して行った実状は何よりの証拠である。

加うるに、先生は教職員を遇すること厚く、且懇切に誘掖指導して、教授中多くの海外留学者・学位受領者を輩出せしめた。更に又、教職員・生徒との融和親睦に努め、文字通り明るい学徒天国を作り上げたのである。政府は其の偉大なる功績に報いるため、先生に正三位勲一等を贈った。その時、専門学校の校長で勲一等に叙せられた人は一人だけで先生の御人格を飾るにふさわしい最高の荣誉である。

先生に教えられた事ども　私は先生の温情に対し、人一倍悉縮していた。それで夏の休暇を迎えると、御家族の皆様を私の寺より六町離れた種楽園にお招きするのが恒例になった。時々早朝にお伺いしたが、御家族の留守の日は、炊事から掃除万端、おひとりやっておられるお姿を拝見した。自分の事は自分でやるうとする心構えとそれの生きたお手本には大いに感動したことである。次は私が中村不折翁の六朝文字を見て興が湧き、他所へ出すはがきにさえ盛んに真似事（遊戯）をしていた頃のこと、先生から「あなたにはヤッパリ、ふだんの文字が似合いますねー」と一喝さ

れた時は、親に叱られたような気がして止めて仕舞った経験がある。

仏教には深い理解を持っておられた　私は登校した日の帰途、しばしば先生のお宅を訪問したものだ。その際仏教の質疑が出された中、ハッキリとお答えができず、赤面する場面もあった。併しこの事は私の浅学を見直すよい機会となった。

私は大正十二年の春、中村不折翁の邸をおたずねし、堅三尺・横九尺の大絹に六朝文字で横に「大慈悲心」と揮毫して貰うことを懇請した。先生は暫らく考えておられたが、

「この四字の中、三字とも心が並んでいてまずい、何か他の語句に変えられませんか。」

「墨色のニエアンスをだすには、絹を使うより紙を用いる方がいゝとおもうがどうしましょう。」

など、色々な高説を承わったが、結局私の望みどおり、お願いすることにした。しかし私が持参した五枚の絹本はすべて不成功に終わった。先生曰く「こういう大字を絹に書くのはじめてで、本当はけいこがまだ足りないのだ。その代わりこの次には、充分けいこをした上で、上等な唐紙に清書してお寺へ贈りましょう」と念をおされたことがある。コンナ辺からか、不折翁の絹本は私の処で焼き捨てられるのではないかとウワサが針塚先生の耳にもはいり、「それはもったいない話だ、よし文字の出来不出来はあるにせよ、「大慈悲心」とは如何にも有り難い語句である。之を以て自分の愛刀を包みたいから、是非一枚頒けて欲しい」と申さ

れ早速差し上げたことがある。此の仏心（は大慈悲心是れなり——観無量壽經）があればこそ所持者護身の刀ともなり、又御国の守り刀ともなることは多言を要しない。

先生のお口添えが元で重要美術品が手にはいった話

私ははじめ先生のご紹介で野口駿尾画伯を知ることができた。画伯は大正十四年の夏、私の寺に酷暑を避けられたのが縁となり、堅二尺八寸三分・横七尺八寸の絹地に努力の大作を描いて寄進された。画題は「漢武帝秋風之辭」といふ、古文真宝の劈頭に出て居る「歡樂極まって哀情多し」とうたわれた千古の名詩を表現したものだ。画伯は又同年十二月六日だったが、会心の作、「椰子の下風」を原所有者より私へ譲渡するよう勧めて下さった恩人でもある。この作は、画伯が大正五年五月に海軍御用船吉野丸で渡航、マリヤナ・カロリン・マーシャル諸群島を経廻り、諸種の風物に接して描いた記念の一大画帖で、末尾には波多野宮内大臣より天覧を賜った趣の書翰が添えてある。

現在常楽寺重宝の一といわれる家康真筆の「日課念仏」はいつ頃から寺の所有となったか、これについては次のいきさつがある。昭和七年、針塚先生が蚕専の柔道師範（八段）飯塚國三郎さんの家を訪問された折、同家に伝わる家康の「日課念仏」の巻物に目を通し、「実にすばらしいものを見せて貰った、此の品はお宅にしまっておくよりか、半田さんのお寺へ奉納して散逸しないように頼んではどうか」と進言して下さった由。そのお蔭で私は飯塚さんから珍しい宝を頂くことができた。たまたま同九年、文部省宗

務局が全国的に家康真筆の「日課念仏」を血眼で捜していることをきき、急いで文部省へ持ち込んだ。処が同年五月十八日附をもつて、重要美術品に認定したという通知を受けた次第である。

蚕霊供養塔の建立 本校創立以来、蚕学研究の犠牲となつて、解剖台上に散つた蚕児は数え切れない程だ。そこで寮生の有志は、是等蚕児の霊を慰めてやろうと決意し、学校当局の賛同を得たので、大正九年開校十周年記念祝賀会に合わせて厳かな供養祭を挙行した。当日（十月二十九日）の午前十時、雨天体操場の裏、桜と杉に囲まれた景勝の地に、木の塔婆を建て、私が導師となつて読経、校長先生以下教職員、生徒全員が塔前に整列参拝し、校長さん外代表者の焼香があつた。その後毎年五月一日を期し梵鑑を鋪いて来たが、大東亜戦争が熾烈となるに伴い、中止するの止むなきに至つた。初めのうちは、その都度新しい木塔婆を造つて立てたが、校長さんや校員一同から沢山の寄附金が出され、立派な仙台石の碑が建つことになった。この碑には先生の筆で「蚕霊供養塔」の文字が鮮やかに刻まれている。

#### 葬儀の導師となる

先生は昭和十三年、御退職の後、功成り名遂げて、群馬県群馬郡豊秋村大字中村の実家に帰省し、悠々自適の生活をして居られた。然るに同二十四年九月廿一日、七十八才を一期として溘然長逝されたとの訃報が伝わるや、母校の教職員・生徒・卒業生を始め、先生に縁故ある者の哀悼は響うるに物なく雲のごとく群集して柩前に哭した。私の処へは戒名と導師を乞う旨の電報が届いた。近くの菩提寺をさしおき、私に打電されたわ

けは外ではない。よくよく因縁の深重なるに感泣するのみである。私は取るものもとりにあえず、御郷里に赴き、故針塚長太郎先生の葬送の盛儀に臨み、高德院殿芳蔭長安居士の為に即身成仏の秘印を授けた。此の引導に依って、尊靈は安らかに浄土に冥せられたことを信じて疑わない。

(天台宗大僧正 元善光寺副住職)

## 質実剛健

——着任の日に坊主頭になった——

岩崎喜三郎

坊主頭になれ 大正九年陽春四月十五日の夕暮七時間の汽車の旅（其の頃上野から上田までは七時間を要した）を終えて、トラノク一つ提げた青年が上田駅のホームに降りた。それでもその青年は年齢に不似合いなじみな背広を著け、髪は右から七三に分けた髷格のがっちりして血色もよかった。それが今度蚕糸専門の柔道教師として赴任してきた男であった。その男は誰れあらうこの私自身であったのである。これがそれから足掛け十一年間上田で生活する第一歩であった。もっとも上田の土を踏むのは、これが三回目ではあった。第一回は大正の初め中学生の時父と佐渡ヶ島に旅行の帰りに、台風に遭って神川の鉄橋が壊れ、上田で足止めされて、やむなく上田駅前の旅館に一泊させられた時であった。第二回目は新潟県三条中学の夏休み柔道練習に誘われての途次、学

校先輩の前任者の下宿を訪ねて一泊したことがあった。この先輩が高崎市へ養子に往く為に、その後任として私が推挙されたのである。私は前年の十二月まで、学生々活中に一年志願兵として千葉県佐倉の歩兵連隊に在営していた。帰ってから四カ月間一級下の級に学生生活を繰り返して、その人達とこの年の三月卒業したのであった。

私は学校に往く道がはっきりしない為に、駅前から人力車に乗って往った。学校に乗りつけた所学校は早退けていた。校長先生に刺を通じた所、最早お帰りですとのことであつたが、小使さんが親切に自宅へ電話してくれた。先生（以下先生と呼ぶ）が電話口に出られて自宅へ直ぐ来る様に言われたので、道順を聞いて松尾町のお宅にお伺いした。これが私と先生との接触の初めてである。

松尾町の奥の応接間に通されて少し話をした後、一緒に外出し、近藤牛肉店の二階に案内されて、スキ焼を御馳走になりながら、四方山の話をした。その時の話は格別印象に残ってはいないが、私の髪の毛を見て「武道の先生は質実剛健の範となる為に学生と同じ様に髪を刈ってはくれまいか」とのことであつた。「承知致しました」と暫時の後に暇を告げた。夜も大分更けたが私は予定通りに神川の国分寺を指して歩きながら、途中常田町の大宮さんの側に一軒の床屋を見付けた。床屋の親父は「お刈りになつても宜しいか」と何度も念を推した末坊主刈りにしてくれた。それ以来私は今日に至るまで髪を伸ばしたことがない。従つて上田では

私の長髪を知ってる人は先生以外に無い筈だ。

こうして私の其の後足掛け十一年に拂る上田の生活は始められた。在職中随分繁々先生のお宅へはお伺いした。或る一時は殆ど先生の御家族の一員にまでなっていたこともある。学校職員の中で先生の家庭に入り込んでいたのは私位のものであったかも知れない。

**先生の家庭** 先生の家庭は極めて円満であった。三男六女の子福者でもあった。しかし男のお子さんには恵まれなかった。長女梅子さん・次女輝子さん・長男俊一君・次男克海君・三女ふぢ枝さん・四女百合子さん・三男正樹さん・五女美津枝さん・六女貞子さん。以上が先生のお子様である。

不幸にして長男俊一さんは二十余才で亡くなられたし、次男の克海君は、先生が最も期待して居られた様子だったが、中学三年頃カリエスに侵されて上田病院に入院、約一カ年位の間にカリエスが体中に転位し、数回の大手術のかいもなく大正十一年九月半ば亡くなられた。丁度其の頃先生は旅行先から帰った後に腸チフスの疑いで自宅の前の空家に自宅隔離生活を暫く送って居られた時であった。余り喜怒哀楽を面に表さなかった先生であったが、可成り落胆して居られた様子であった。それでも三男の正樹さんが学位記を得られ、それもまだ先生御在世中であつたので正樹さんも「それでも親父の生きてる間に学位を得たのがせめての慰めでした」と先生が亡くなられてから述懐されたのを聞いたことがある。

また女子の方々では六女の貞子さんが遺児一人をおいて亡くなられた。他は皆現在健在である。梅子さんは一度嫁したが夫に亡くなられて間庭決夫さんに再婚し横浜に居られる。二女の輝子さんは裁判官の中里龍さんに嫁せられ、夫君は戦後シベリヤに抑留されたが無事帰還後亡くなられた。ふぢ枝さんは上田専門学校卒業の都丸晴治さんに嫁されたが、夫君は戦歿し渋川在の先生の実家に身を寄せて居られ、戦後の農地開放で大分苦勞をされたそう。二男二女の皆様成人され特に二人の男の方々は何れも群馬大をそれぞれ卒業して職に就かれ、各々其の道で相当の研究をして居られる由だ。

先生一族には正樹さんを始め博士が二、三人居られる。百合子さんと美津枝さんの夫君、梅子さんの御子息それぞれ学位を得られたと聞く。

積善の家余慶ありとか古語に云う。先生は教育家として長年子弟の教育に身を捧げられ功成り名遂げて故山に起き伏しされて、余暇を楽しむ時を得られ、お好きな漢籍を友として晩年を送られた。只奥様に先だたれて、余生暫く寂寥を覚えられたことをお察し申し上げて筆を擱く。(元上田蚕糸専門学校校助教授 柔道六段)

## 剣道師範としての追憶

小 沢 丘

昭和三十六年四月十五日(土)は雨上りの薄曇りであった。警

察庁のレクリエーションで渋川駅に下車したのが午後三時頃、一行は群馬県警のバスで草津温泉に向かった。榛名・赤城の雄峯を遙かに眺め、又吾妻川の仙峽を脚下に見おろしながら、恩師榛嶺針塚長太郎先生はこの近くで生まれたのだ、そして三十余年前の先生を思い出すと上州の山河は一層親しみを増すのであった。私が上田蚕専に御厄介になったのは、昭和二年だった。針塚先生は校長として真に円熟された時代であったでしょう。先生は学問の研究は無論であるが、体育・スポーツにも深い御理解を持たれ、柔剣道を始め庭球・野球・陸上・弓道・登山等々、総ゆるスポーツを奨励された。その中でも異彩を放っていたのは柔剣道の寒稽古だった。寒稽古と言えば毎年東京から、今は亡き飯塚国三郎十段を招かれて指導を願ったばかりでなく、朝五時というに真先に道場に出て、学生の稽古を見ておられた。剣道部長和田仙太郎先生・柔道部長岡徳治郎先生を始め、殆ど全教官が稽古場に見えられ、学生に交って稽古をされる方が多く、寒に壮観であった。紡績科長石倉新十郎先生や物理の原田親雄先生などは皆勤組であったと思う。針塚先生は刀剣の研究では一家をなして居られた。斯界の泰斗大滝照太郎先生・和田先生などと常に研究しておられたようである。刀も沢山持って居られ、私も一振藤原大掾を頂き、今も家宝として保存している。榛嶺先生は書道も達人でおられ、あちこちの学校・公会堂・道場等に先生揮毫の扁額がある。私の道場興武館にも「学劍養正」と書いて下さった。先生は非常な健脚で山登りは得意であった。先生や井上柳梧先生・和田先生のお伴をして、戸

隠山や美ヶ原に登ったことがある。先生の後をついて登るのは仲骨が折れた。当時私は廿六か七であったと思うが先生には叶わなかった。

先生はまた謡曲・仕舞が堪能で、親世流の高橋清輝先生を聘して週一回稽古をされた。阿形輝司・石倉・早川直瀬・遠藤保太郎・佐藤利一・岡・庶務課長小沢綱吉老・柔道の岩崎喜三郎・清水寛孝・森山二郎の諸先生などは非常に熱心で、又大変上手であったように思われた。校長夫人を始め各教授夫人が毎回熱心に稽古されたが、御主人連に交っての温習会などは賑やかなものであった。私も針塚先生に勧められて入会したが、何せ昼は剣道や体操などをやってつかれているので、後の方で居寝りばかりしていた。従って少しも進歩しなかった。でも日本大学に入ってから国語の単位をとる時には役立ったと思っている。

先生が文部省視学官から蚕糸業のメッカ上田に専門学校長として赴任されたのは、三十八才であったとか、是の一事をもってしても如何に先生が一世に優れた教育者であったかと窺われる。其の後奥様も他界されたが、御令息正樹博士が先生の遺志をつがれ、斯界に於て愈々重きをなされていることは、慶びに堪えない。私は二十五から三十才迄の青年時代を、針塚先生の膝下にあつて親しく御指導を受けたことを、今でも非常に幸いであつたと思っている。美髭を貯え、慈眼の君子針塚長太郎先生の温容は決して終生忘れることが出来ない。

(警察大学教授 剣道範士)

## 針塚先生のおもいで

石井 鶴 三

針塚先生を存じあげたのは、上田蚕糸専門学校に針塚校長の銅像建設の議が起り、その原型制作を私が依頼された時からで、昭和九年だったと思います。その時先生は六十四と承りましたが、私からすれば御老体とも申すべきお年でありましたが、先生はお健やかではつらつとして、少しも御老人とはお見えになりませんでした。

先生の銅像は卒業生の発起で校庭に建てられるということになりました。坐像ということでしたから、先生が校長室にくつろいで居られるお姿をお作りいたしたらいかと申したところ、発起の方々も御異存ないようすで、卒業生のひとり校長は手紙をよく書かれる方で、手紙をさしあげると、すぐ御返事を下さった、いつも「御手紙只今拝見」とあるのが感銘している、手紙を書いて居られるお姿はどうであろうといわれました。それは面白からうということになり、校長室の安樂椅子に坐って、左手に巻紙右手に毛筆をもって居られるお姿に作ることにいたしました。

初夏の頃およそ一カ月ばかり上田に滞在して、先生のおさしつかえないかぎり、校長室へうかがって、坐像の小型と実大の胸像をつくりました。時々ポーズしていたときでしたが、大体は先生が執務して居られるところを、お邪魔にならぬよう、少しはなれ

たところから拝見して仕事を進めました。校長室は広いので、その一隅北側の窓ぎわが光線の具合もよく、恰好の仕事場になりました。本制作は人物六尺くらいになる予定でありました。その原型は東京の私のアトリエで作ることにいたしました。ですから上田で作ったのは、エスキースとエチュエードというわけでありました。先生のお住まいは上田の新参町のあたりであったかと思ひます。ある日自宅へうかがって夕飯を御馳走になりました。奥さんのお手料理でありました。何が好物かときかれましたので、野菜の揚げものが好物と申したところ、おいしい精進あげをこしらえて下さいました。奥さんにはその時はじめてお目にかかりました。奥さんがあたゝかい心で学生を迎えられるので、先生に対する敬慕の心とともに、学生たちは先生のお宅へよくうかがうと承りました。教師と学生の間が親近になるには、教師の細君がよくなくてはと先生もおもらしになつておられました。

なお上田で制作中に、先生に誘われて浅間高原へつゝじを見に行きました。浅間山を東から望む上信国境の裾野一面に、つゝじが花ざかりで燃えるような真紅の色をひろげていました。こゝは今日では名所として人に知られているが、その頃はあまり行く人もなかったやうで、荒涼とした浅間の裾野に真紅のつゝじが原をなしている光景は一種の奇観ともいふべきものでありました。この時林・蒲生両教授も同行され、鬼おしだしの岩の間を少し登りましたが、先生は随分健脚で岩から岩へ軽々と歩みをはこばれるお姿に感心しました。若い両教授が先生のあとについてゆくのに

骨が折れたといっておられました。先生は常に山登りをしておられたようであります。

先生銅像の除幕式はその翌年の秋だったと思います。台石には浅間連山の麓にあったかたちのよい自然石を据えました。その台石をさす為委員の方たちとあちこち歩きましたが、先生も私たち一行に同行されました。

針塚先生の銅像は戦争中供出されて今はありません。台座が自然石で、その周囲に石を配して庭づくりをしてあったので、像がなくなってもそのあとがあまり醜くはならなかったように思います。その後習作として作った胸像があつた場所にも据えられましたが、もとよりあのような場所へ置くものとして作ったのでもなく、台石もまにあわせでありますから、何やらおかしい感じがあります。針塚先生のおもいでではなくさんあつて、記憶をたぐってゆけばきりがありません。こゝにはその一端を記すにとどめますが、温厚なお人柄をなつかしく思います。(彫塑家・日本芸術院会員)

## 寿像の台石

山 浦 政

小県上田教育会館の講堂に、針塚先生の書かれた「展喙啄機」の額面が掲げられている。私の知って居る針塚先生は此の語の権化者の様に思われる。其の様な人格の先生の寿像が、昭和十年十月二十一日蚕糸専門学校創立二十五周年記念式典の日に千曲会か

ら学校へ献納され其の除幕式が行われた。

寿像の原型は石井鶴三先生の表現で、鑄造は安部胤育先生の鑄込みである。

除幕の瞬間私には紫の霧が現われて、其の間から後光が射したように感じられた。それは当然のことである。像は石井先生の大芸術で、針塚先生の人格の象徴であつたからである。

私が此の寿像の建設に係わりを持ったのは、千曲会から台石の選定を依頼されたからである。私は御依頼の承諾は申し上げたものの、何んだか時経るに従つて心恐ろしい様になって来て、そうして自信が失せて来た。なぜかと言えば今迄台石の選定に係わつたのは、佐藤長洲先生・正木直太郎先生等の碩徳碑の台石であつたのに、此れは寿像の台石である。形だけで選定したのでは物足りないものがあるだろう、と心竊かに恐れをなしながら、思いを巡らして見た。そうして結局山越弥陀の様に自然の中から像が湧き上つて来る様な感じの石をと思いついて漸く心が決定した。だが實際に於て針塚先生の人格を、石井先生の大芸術を、請け容れ得るような形質等を持つ石が見付かるだろうかの懸念は薄らがなかつた。更に三分の二を土中に埋めての石の力の問題などとは思ひもよらないことになつてしまった。

そこで先ず現場に當つて見ようと、明治神宮前の山谷川の築造に出した石山を中心として、烏帽子岳・三方ヶ峯の南麓で、搬出用具の使用出来ると思われる場所を限なく探し廻つた。そうして充分とは思えないが「先ず」という石を和村海善寺区に見出した。



そこで千曲会の賛成は得たものゝ、愈々となつては針塚先生と石井先生の御承諾を得なければならぬ。自分の心に満足の出来ない台石の候補でのお願ひは真に心苦しい。だが仕方がない。恐る恐る昭和九年六月廿七日にお二人を現場に御案内した。啐啄の機であつたかも知れない。直ちに御承諾を戴いた。こんな嬉しいこととはなかつた。今其の事を考え起こしても血潮の動きが高まつて来る。

其の後此の台石を戴くことを持主の海善寺区に交渉した。五人を区長に選んで争つて居た村落なので、中々の困難であつたが、針塚先生の御人格の力で戴くことが出来た。尙続いての善化は一人の区長で村が治まる様な立派な区に造り上げられた。

搬出は異村関君太氏の力によつたが、七百貫と称する台石がするすると動いて、昭和十年六月七日に学校前に素直に到着し、新講堂の脇に据えられて己が指命を寿いで居た。

像の表現に対しては、石井先生は針塚先生の本来の姿の顕彰をと、椅子に倚つて巻紙を延べながら筆をとつて居られる所を採用された。

それは石井先生が針塚先生の日常生活を深く了知せられたによるものと思われる。そうして表現された日本の大芸術を載せるために選んだ台石である。其の均斉が、其の権衡が、其の姿態が、其の香りが、と恐怖の胸が轟いたものであつた。

愈々像を据える時になつたら、石井先生は自ら起つて石工長谷屋氏と共に本原村に添え石を選定し、台石の欠を補ひ、庭樹によ

つて渋味を加え、背景を探り入れて立派な「枯山水」が出現した。水見えざるも神川の水声を聞く体の、立派な寿像が建設された。私は今此の像を思い出す度に、欠陥ある台石を名台石に造り上げて戴いた関係の方々に、心竊かに感謝の念を捧げている。

今日此の大芸術の寿像は戦争の犠牲となつて仰ぐことは出来ない。然し台石を中真とした石井先生の庭園芸術は、烏帽子連山を背景として光り輝き、針塚先生の人格を寿いでいる。

(元上田小果教育会長)

## 啐啄の機を展ぶ

塩 沢 隆 平

○

私は別に蚕糸専門学校、今の信大繊維学部卒生ではないのです。唯針塚先生というすぐれた教育家を心から尊敬し、専門学校長時代に御親交を願つた一個の人間として、追慕の情を禁ずることが出来ないことから、柄にもなく千曲会の求めに応じて敢て筆をとつた訳です。御親交を願うようになった機縁は、御子息正樹君を小学校時代受持つて、所謂硬教育をして先生からそれを批判されたことがあつたように思うことからです。これは菜根譚の言葉かと思われますが、昭和十三年教育会館が竣工して階上のホールに掛ける額面の文字の揮毫を、会長だった針塚先生にお願いに参上したら、即座に「展啐啄機」と潤達な行書を書かれた(口絵

参照)。これは勿論「啐啄の機を展ぶ」と読む訳だが、無学な私には意味が解りかねて、「どういう意味でしょうか」と問いましたところ、先生は例の笑顔になられ乍ら、「啐という文字は鶏の親鳥が卵を温めながらひよこが出かかる時に、卵の殻の上からつついてやる意味、啄という字はひよこが殻を破って出ようとして中からつつく意味の文字で、この啐啄の機会を把んで、先生と生徒とが愛をもって一体となり教育活動を展開するところに、教育の成果がある、つまりそこに真の教育がある」と言われるのでした。

私はその当時寝ても醒めても子供の教育のことが忘れられない情熱に燃えた時代でしたので、この「展啐啄機」の四字とその精神とをこの上なくよき言葉だと思うと同時に、その傑作である書風に感嘆措く能わざるものがあつた。この書は額面にされて、現在も上小教育会館の階上に、教育のあるべき姿を教員諸君に針塚先生の教えとして厳として掲げられている。又右の書をお願いした時に私も先生の書を欲しかつたのでお願いしましたところ、書いて下さったのが「寡欲以養心」でした。これは四書あたりの文句だと思われるがなまけて居て調べてみたことがない。私は先生と御交際を願つた頃、学校で教える本や参考書以外の書物を乱読したり、大酒を飲んで体をこわしたりしたので、そういった私の欲をそれとはなしに訓戒された言葉としか思われぬ。先生はあの温顔で人に接しながら、おのずから人を戒しめ教えられるところが、どうもあつたように思われる。先生の天性備わつた教育家の天分から、自然にそうされたのだと思われてならない。先生逝か

れて既に十何年、先生を敬慕するの情、愈々切なるものがある。

○

先生が初代蚕専の校長になられたのは、五十年前であるから、明治四十年代の初期であろうが、私は自分の青年時代、即ちまだ先生の御愛顧を得なかつた時から先生の偉さについては聞き知つて居た。先生の三十代だと想うが、文部省の視学官として、信濃教育会総会に來られて一場の講演をされた。その時、*「われ死なば佐久の山辺へ送るべし焼いてなりとも生までなりとも」*と詠んだ有名な奇人で地質学者保科五無齋―北佐久郡出身―が信濃教育会員として、聴講して居て何か先生に失敬にあたる弥次を飛ばしたのだそうです。先生は壇上から「出てゆけ!!」とどなられたが、流石の保科五無齋も先生の威勢に屈して退場出来なかつたと聞きます。これは決して先生の官僚型から出た言葉や態度ではない、あの晩年円熟された先生にもそう言つた意氣壯んな時代があつたのか、いやそれ丈の意氣・氣魄がなければ、初代校長として、あれだけの学校経営の功績を残すことは出来なかつたらうと、これも先生の若き日を間接に偲ぶ一齣です。

○

先生は、群馬県渋川在の御出身であることは何人も知るところであるが、農家の長男に生まれた先生は、子供の頃前橋市までの数里を生家から歩いて中学校へ通学された由ですが、暑中休みなどには田の草までとられて働いたことを先生御自身からお聞きした。先生の御両親も相当硬教育をされ、先生の立身されることを

念じられたことがよく想像される。先生が田の草とりの話をされて、「一日中灼熱の田の水を匍うと、それこそ腰が痛んで仕方がなかった。後に椅子に座って仕事をしようになった時、それがどんなに苦勞な仕事であっても、少年期の田の草取りのことを思うと、苦痛を感じることにはなかった」と述懐されたことを、深い感動を以て今も思い出す。私が硬教育と何度も書くようですが、あれ丈の先生という人格が形成されるには、矢張り御両親の本當の愛からの家庭教育があつたようです。そこへゆくところ今の教育は一つの欠陥がありはせぬかと思うのです。

○

取りとめもないことを書き連ねるようですが、昭和十六年三月、私は上田小学校の本校部に居った。当時上田の小学校は一校制で本校部に上田小学校長がでんと坐っていた。私はその校長と二人で、市議会の参与とかいう名で出席し、議員諸公の学校予算に対する質疑などに答えた。校長先生という方はなかなかの大人で、六部校即ち上田市全体の教員の輿望を担われた人でした。その先生が或る市會議員に、私が議會を一寸留守にした間に五つか六つかの問題を上げて攻撃された。しかも何等根拠のないことで唯攻撃のための攻撃でしたので、私達六人の部長は翌くる日會議を開いて、われわれの尊敬する校長が、市会であるように罵倒されたことは、上田市全体の教員が罵られたも同然で、われわれ六部長の責任である。このまま居るに忍びない、六人が揃って断然退職しよう決議し、辞表を時の市長伊藤伝兵衛氏に提出して、学

務部長中川金正氏に伝達方をお願いした。その頃の制度はそういうことになって居た。伊藤市長―今の伝兵衛氏の敝父―は涙を流してわれわれを慰留されたが勿論応じなかった。信毎紙などはわれわれの行動を支持して信州教育魂の發揚だなどと言い、県下のあちこちに激励の声が上がり、上田市民の輿論もわれわれの側にあつた時、針塚先生は一日御多忙のなかをさいてわざわざ私の家を訪ねられて言われるのに、「諸君の態度は立派だ、輿論もそれに傾いている、しかし上田市の情勢をみるともう峠に来ていると思う。あとは却って下がる向きになるう。余り頑張るのは諸君の為にとらない。此の辺で辞表を撤回されることを私は願います」と言われるのです。私共のことを真に思つて下さる先生の人間愛にふれて、心で感謝の涙を流したが、そこは青年血氣にはやり、「私共は辭職の真似ごとをして居るものではありません。本當の決意のもとにやったことで、先生に仰言られても撤回は出来ません」という強氣であつた。しかし先生の言の如く上田市の他の市會議員もわれわれをなだめ、市のために枉げて辭意を醸してもらいたいと衷情を披瀝して来た。しかも例の市會議員と市會議長にやめて貰ったから諒解して欲しいとの誠意を市会が示すようになった。この辺の機微な情勢を察しられた先生の洞察力と判断力には實際打たれたものです。

○

先生の三男正樹君を教えたことを書いたが、先生以外女性のみの中で育つた同君を私は三カ年教えた。先生の後継者として過ま

しい人間に育て上げたかった私は、相当な硬教育をした。今の時代なら明らかに暴力だと言われることさえ敢てして、先生の後継者として恥じない人間に教育しようとした。今では立派な農学博士の学位をとられ、アメリカにも留学して日本の農学界の存在となった。私の教育方法について先生は言う迄もなく批判的だったと思われるが、その点には一言もふれられず、青年教師のなすが儘にされたことは、民主主義の現代でも、いやそういう時代だから、なおさら口やかましい父兄には出来ないことであろうと思われる。先生が嘴の黄色い一教師に対し何等の評価もされず、黙ってみて居られた事実を、私は容易になし得ない偉大な有難いことと思われてならない。

○

先生は晩年信濃教育会の会長を確か四、五年間推されるが儘に仕方なしにされた。口やかましい信州の教員をひきいられたことは本当に大変なことと思われる。しかるに先生は例の大人風になここにこされながら、取るべきは取り排すべきは排して、少しの失敗もなかった。それどころではない、總會などに於ける先生の挙措動作態度は本当に立派なものであった。歴代の名会長に断じて勝るとも劣らないものであった。換言すれば堂々たる名会長だったことを記憶する。喧々譁々の会員をまとめてゆくことは、決して楽なものではないと思われる。それを為し得た先生を教育家として尊敬しない訳にはゆかない。

その昔奇人保科五無齋を文部省の視学官として信濃教育会の総

会で叱咤された先生の本当に円熟した会長振りだったと申してよいと思う。先生を偲んで切々たる感慨にひたされる。

(元上田小果教育会長)

## 針塚先生の思い出

角 田 恵 重

私は少・青年の時代から八十一歳の今日に至るまで、極めて沢山の知己・友人に接したが、針塚先生ほど尊敬し且つ好感の持てる人は絶無であった。先生無き現今でも時々追憶して感謝の念にかられつゝあります。私は先生との子弟関係は無いが、先生の若かりし最古の事を知る一人だと信じています。

回想すれば六十余年前の明治三十一年頃のことでした。先生が農科大学を卒業されて後、文部省の実業学務局の視学官と云う官職に就かれ、まだ新婚後間もない頃、東京青山南町六丁目の裏通りにあった或神社の森の側に、一家を構えられた時のことでした。その頃は汽車だけはやっと前橋から東京へ通じたが、まだ市内に電燈もなく、上野・品川間に狭軌の鉄道馬車が開通していたのみで、当時田舎から東京の最高学府を卒業したものは県内でも稀有であったにも拘らず、先生は既に相応の官職に就かれて居たのであるから、少年時代非常に向学心に燃えていたと見えます。後に聞く所によれば最初東京遊学の許可を父母から受けるには余程の難関があったそうです。

私は先生より後れて上京し、某校へ入学したが、市内に一軒の知る家も知人も無く、寂寥を感じて居た際、先生のお宅の近処に下宿して居り、且つ先生の渋谷川在の御実家と私の家とは一里弱しか離れて居なかつた関係から、度々お尋ねして御高話を拝聴しました。

先生はその後上田蚕糸専門学校の創立に尽力され、初代の校長として赴任後全く半生を上田で過ごされたことは衆知の通りであります。上田在任中も御令弟である私の別懇の卯八さんを通じて、東京青山高樹町のお宅で度々御目にかゝる機会も多く、何かにつけて先生との文通は絶えたことはありませんでした。昭和十五年頃先生が渋谷川へ引退後は、家が近い関係上度々拝趨して高説を承ると共に、先生も亦拙宅へ来訪されることもあって親密の情は前にも増したものがありました。最もよく晩年の先生を知る者の一人と自負して居るものです。

先生は渋谷川在の豪農の家に生まれ、何一つ不足なく育ったにも拘らず、家業には常に精励され、東京遊学中も帰省する毎に農業を手伝われ、夏の炎天下よく水田の除草をして居るのを見受けたと云う古老の話でした。又先生が現在の住宅を建てられた際は、私はそのお祝のしるしに庭木を荷馬車一台持参して進呈したことがあります。先生がそれを自ら仮植されるのに鉄の使い方の巧妙なるには一驚を喫しました。数ある農学者や農業教育者の中でも、先生位農業の実際を身につけた人は、少なからうと感心させられました。

渋谷川に引退後は私も屢々お伺いしましたが、先生の来客の応待ぶりの懇切には驚きました。私のような一介の百姓がお尋ねした時でも、必ず玄関までお出でになり、更に庭下駄をはいて門外まで送り出して別れの挨拶をなさるのが常で、誠に恐縮に感じていた次第です。私も長い間数多くの人を訪問したが、これ程鄭重に応接した方は先生以外にはありませんでした。

先生の書は又頗る立派なものでありました。若い頃中国の顔真卿でも学んだものか、或は又自家独創のものか、その草・行書に至っては、誠に雲煙竜蛇の躍るが如く、筆力雄健でよく先生の氣象と個性を発揮したものでありました。晩年悠々自適された頃は多くの人に依頼されて染筆された見え、故郷の近傍にはその遺墨が多く散見されるが、皆立派なものばかりで一代の書家と云つてもよい程です。

之を要するに明治・大正・昭和の三代を通じて、単に教育方面からのみならず、わが上毛が生んだ最も偉大な人物と推賞するも決して過言で無いと確信するものであります。戦後世情輕薄に流れ、やゝもすれば郷土の偉人を忘れがちの今日に於て、先生の御逝去後諸人の記憶の猶新たな時に、先生の伝記刊行の企劃されたことは、誠に機宜に適したものと私も喜びに堪えず、思い出の一端を記しました。終りに臨んで先生を憶うの巴調一絶を詠じて擧めます。

蚕糸教育四旬春、門下俊髦千万人、名遂功成、故山睡遣  
勲長、照、曲川浜、  
(友人)

## 蚕玉神社

鈴木 林 九

信州上田は十六年住んだ第二の故郷であり極めて印象の深い懐しの土地であります。北に高く聳える太郎山、南に低く流れる千曲川、上田城址を包容した蚕糸の町であって、針塚先生と三吉先生は山と川との合言葉のように、万人が仰ぐ蚕糸業界の先覚者であり、永久に忘れることの出来ぬ恩師であります。

年移り人変わり、既に御二人共故人となられ、私も今年七十五才になり老境にはいりましたが、常に御指導を深謝し御遺徳を想起して、追慕切なるものがあります。

私は大正九年から昭和十一年まで、長野県蚕業試験場上田支場に勤務し、その間長男次男三男を上田中学に、長女を上田高女に又末弟を小県蚕業学校に、更に末弟と長男が蚕糸専門学校に学び、直接先生の御教導を受ける等、上田は私の教育の地であり、先生の御教化を夫々受ける事が出事た事を誠に幸せに思っている次第であります。

当時は生糸は輸出の大宗なりで、所謂「蚕ならでは夜は明けぬ」蚕糸の黄金時代で上田地方の養蚕も極めて盛んで、儲かる養蚕はまず桑作りをと提唱し、養蚕農家の相談相手になる機会がしばしばありました。たまたま西塩田の前山養蚕実行組合に行った時、各位と膝を交えて桑談義をし、また桑園の実地指導など、組合員

諸君も極めて熱心な一日でありましたが、その時組合長さんから、此処に蚕玉神社の碑を建て、蚕神をまつり、以て蚕霊の供養をして、お蚕様に報恩感謝の意を、組合全員で表したい、それにはお蚕の生神様である、上田蚕糸専門学校長の針塚先生に御願ひして、蚕玉神社と一筆書いてもらいたいとのことであり、私から先生に是非お願いしてみてくれと言うことになりました。さあこれは困った事になったと思ったが、兎に角何とか御願ひして見ると言うことで帰った。依って数日後先生の自宅に御伺ひして、その事情を申し上げたところ、先生は即座にお引き受け下さって、威儀を正され、禮殿に太筆を取られ、墨痕鮮やかに、蚕玉神社、と揮毫されました。その時の端然とした、崇高なる御風格が今日目前に彷彿として、感激新たなるものがあります。

猶右は早速組合に届けられ、石に刻まれ立派な碑が出来て、盛大に蚕霊供養祭が行われた事を記憶しております。

このときの揮毫のお姿は、戦時中に惜しくも撤去されたという針塚先生の御立派な坐像、信州大学繊維学部旧玄関入口の右手寄りに、揮毫の愛筆を持たれた御姿、とだぶっていつまでも脳裏に刻みつけられております。

(元長野県蚕業試験場上田支場長)

## 遠大の見透しと微に入る御注意

### 土屋登美次

針塚長太郎先生は上田蚕糸専門学校設立が決定された当時、文部省視学官で創立事務を取扱われ、帝国大学農科大学動物学教室へ佐々木忠次郎先生・外山龜太郎先生と打ち合せのため、度々お見えになった。当時私は外山先生の実験遺伝研究の助手をして居ったので、針塚先生の御高見を拜聴の機会があった。そして蚕糸専門学校が創設され、先生が初代の校長になられた。私の父高橋清七は養蚕科講師の嘱託を受け、昭和五年に死去するまで長年月在職、その間私は上田の学校へ行く度毎に先生にお目にかゝって、御高見を拜聴し、自分も御報告したりしたので、実になつかしい思い出が沢山ある。

先生は強がりの様に感ずる一面があった。上田の冬はなかなか寒い、ある非常に寒い朝であった。先生は「痛快に寒いですなあ」と申され、寒くて困る意味の言葉は決して口にされなかった。

先生は蚕種問題について早くから「蚕種は製糸原料の基本だ。近き将来この蚕種問題は強力に原料政策の中心課題として進出する。蚕種箱を背負って戸々の養蚕家を訪問することは必要でなくなる。自動車で養蚕団体に蚕種の配付を行なう時代は直ぐに来る。蚕品種は製糸原料として優秀な形質を持つものが採用される。原蚕飼育や産卵量の多少は、二次的に考えねばならぬ」と主張され

た。まことに先見の遠識で、現在は先生の主張された通りになって居る。

又先生は父高橋清七に特殊な飼育・栽桑等について、特に注意して観察検討すべきことを命ぜられた。条桑育に関する調査研究はその一端を示す実例である。

大正七年柳田頼母氏が簡易即時解剖による蚕卵胚子調査を考案し、広く其の技術普及に乗り出した。同八年正月先生に御目にかゝった際その話が出て、当時専門学校教官には蚕卵胚子解剖生理の研究に着手して居る人が居らないので「実業界の技術進歩と並行する指導教育を推進しなければならぬ」と心配して居る。君は外山門下でその点自信があるであろう。学問のため協力を要望する」とのお話であった。「私の技術で御満足下さるなら」と即時快諾実行に入り、大正七年大学で実施した催青卵（固定）の、日支欧三系統の永久標本作製し、日本種（青熟）の催青全経過を顕微鏡写真に仕上げた。此の期間は六週間を要した。大正十四年一月父清七の還暦記念として出版した『蚕卵胚子解剖図説』はその記念である。先生は『永験蚕之誉 寿高橋蚕翁 榛嶺』の題字を贈って下さった。

（塩原蚕種常務取締役）

## 素朴な御帰郷

若 林 市 朗

昭和十五年針塚先生御一家が、三十年來お住まいになられた上田をお引き上げになって、渋川在の「中村」へ御越しになる時お供をした。上田駅での沢山の御見送りの方々を後に、途中、滋野駅通過の際長岡量三氏御挨拶の姿の他は殆ど忘れてしまったが、渋川駅に着いた時の光景は二十余年後の今日も、今なおありありと思い起こす事が出来る。

小雨降る駅には、中村区の御出迎えの方々約三十人程が居られ、雨にそなえて車をも御用意されてあったが、先生は一言「歩きます」と、おっしゃりながら、傘もさされずに先頭を切られてしまった。御出迎えの方々がこれに続き中村迄約二十分の行程である。奥様・お嬢様方と共に、供の私迄自動車に乗せられ一足お先に、玉石敷きつめた新居玄関に着くという私にとっては誠に面はゆい状態となつてしまつた。

やがて先生御一行の到着、殆ど近くの農家の方々と思われる御出迎えの人々に対し、先生は御挨拶されたが、

「私は明治二十二年故郷を出で、以来五十年皆さんには誠に御無沙汰を重ねてしまいました。本日只今帰つて参り又元の百姓に戻りました。何卒心安くおつき合ひの程をお願いします」

の一節をお聞きした時には目頭がジーンとして来て仕方がなかつ

た。

錦を着て故郷へ来る。然しこれは余りにも針塚先生らしい素朴な御帰郷風景ではあつた。  
(画家)

## 初産の時の温かいお言葉

木 村 や よ い

西ヶ原の教婦養成科を卒業して、三年ばかり地方に勤務していましたが、本多岩次郎先生から呼ばれて「上田蚕糸専門学校の三谷先生のところに行きなさい」と申されました。上田は私の郷里でもあり、「専門」と言えば地方の人気の中心でもあったので、私は喜び勇んで上田に参りました。今更ながら、きれいな山に囲まれた木の香も高い新しい建物でしたし、先輩の松岡愛さんも居られたので、最初から気持よく、嬉しい毎日を送ることが出来ました。校長先生には、実習部の式で訓辭を頂く時に、お目にかかる程度でしたが、歩き方から手の振り方、壇にお上りなる時の態度、せき払い、お話の調子など、すべてが、実にお立派で、しかも何とも言えずなつかしく、あたたかい親しみを感じさせましたことが、若い乙女の胸に固く刻み込まれて、忘れられません。

学校の儀式には、その頃全く珍しい大礼服をお召しになり、人力車で堂々と出校されましたが、いかめしい礼服に包まれながらも、そのお顔には、いつに変わぬ温かさが、にじみ出ていました。

現在の天皇陛下が、まだ皇太子殿下でいました時に、学校に行



啓されたことがありました。大正七、八年頃の暑い時だったと覚えて居りますが、その時殿下を御案内して参られた校長先生のお顔は、これまでついぞ見たことのない體敵そのもので、これを遠方から拜んでいた私どもにもおかに緊張して、態度を改めたことを覚えて居ります。

私が勤務中初の妊娠をいたしました時です。まだ「産休」などの無い頃でしたし、勤務に差支えが起きるのを心配し、校長先生に直接お願いして、やめさして頂こうとしました。今から考えると三谷先生にお願いするのが順序であり、それまで校長先生に只の一度も直接お目にかかったことの無い私として、大変出過ぎたことですが、それだけ先生の全身には、私ども学校の下々の者にも、何か父親にすぐれる様な、温かさと頼もしさが、あったからだろうと、考えられます。事情を、顔を赤らめながら、とぎれとぎれに申し上げて、「やめさして下さい」とお願い致しましたところ「それだけの事情では決してやめる必要はない。時が参ったら安心して休みなさい」と、全く思いがけない力強いお言葉に、ハッとしていますと、傍から奥様が「そうですとも、これから一層注意して元氣な赤ちゃんをお産みなさい」と言う意味の、情の籠ったお言葉を頂いたのです。私はこれで、ほんとに心から安心して、引続き勤める決心をしました。その時三谷先生や実習部の他の先生がたには、どんな風に申し上げたかは、忘れてしまいました。時が参って休暇をお願いしている時に、昇給の辞令を頂きました。丁度その時期に当たっていたのでしょうが、産褥に

居た私には、何か校長先生の特別の温かいお心を考えて、涙が流れて止まらなかったのです。その子供も今は四十才を越えて居ります。老いのため大かたの記憶は失ってしまいましたが、このことだけは昨日のようにはっきりと浮んで参りました。

(元上田蚕糸専門学校製糸科教婦)